

アイちゃんリアルへ行く

シュペルロ・ギアルキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アインズ・ウール・ゴウン魔導国のアダマンタイト級冒険者・イビルアイはある日、調査中の遺跡の中で遭遇した魔神の攻撃を受け世界から弾き出されてしまう。

弾き飛ばされた先はユグドラシルの終焉を迎え虚脱の涙を流す鈴木悟の部屋。

全てを失ったイビルアイ アインズ・ウール・ゴウンを失った悟
世界から失われた少女と全てを失った男。

二人が過ごす退廃した現実世界でのささやかな新生活のお話。

目次

| | | |
|-----|------------------|-----|
| 第1話 | アイちゃんリアルへ行く | 1 |
| 第2話 | アイちゃんリアルに居る | 11 |
| 第?話 | アイちゃんメイドをやる | 20 |
| 第3話 | アイちゃん悟の家に居る | 27 |
| 第4話 | アイちゃん悟と話し合う | 38 |
| 第5話 | アイちゃん買い物に行く準備をする | 51 |
| 第?話 | アイちゃんとハロウィン | 61 |
| 第6話 | アイちゃん買い物に行く・前編 | 72 |
| 第7話 | アイちゃん買い物に行く・後編 | 81 |
| 第?話 | アイちゃんとクリスマス・イヴ | 91 |
| 第?話 | アイちゃんとクリスマス | 96 |
| 第?話 | アイちゃんと節分 | 101 |
| 第?話 | アイちゃんとバレンタイン | 106 |
| 第8話 | アイちゃんナンパされる | 112 |
| 最終話 | アイちゃんリアルを続ける | 124 |

第1話 アイちゃんリアルへ行く

——死闘が終結する。

遺跡の最奥にて待ち構えていた謎の魔神の胸にイビルアイが持つ水晶の短剣が突き立ち、魔神が上げる断末魔の絶叫が広間に響く。

『グオオオオオオオッ!!』

ずるり、とイビルアイの手から力が抜け、魔神とともにイビルアイもまた地面に崩れ落ちる。イビルアイにはもはや体力も魔力もほとんど残されていなかった。

だが、ぎりぎり間に合ったという安堵感が満ちる。辛うじて魔神は倒したが彼女の仲間たちも大きなダメージを受け、ほとんど戦闘の続行が出来ない状態だったのだ。

しかし、安堵するには早すぎたことを直後に気付く。

「イビルアイ！ 魔神の様子がおかしい！ 離れて！」

皆の傷を癒やしていたラキュースの絶叫を受け、ふらつく体を起こし、崩れかけた魔神の身体が不可思議に発光するのを確認する。

「なっ!？」

『オノレ…我が…最後ノ魔力デ…!!』

最後に魔神が何かを仕掛けようとしていると悟り、慌てて離れようとするが、足に力が入らず再び崩れ落ちる。魔神の魔力が最後の収束を果たすのを感じる。もう逃げることも止めることも間に合わない。

「イビルアイ！」

「手を伸ばせ！」

「こっちへ！」

「急いで！」

仲間たちが叫ぶ。

だが、もはやどうにもならない。

「バカッ！ こっちに来るんじゃない！」

ただ、最後まで自分を助けようと必死で手を伸ばす仲間たちの存在がイビルアイの冷え切った胸に暖かな満足感を与えてくれていた。

しかし、ふと…。

(モモン様にはもう会えないんだな…。せめて最後に一目会いたかった。最後に会ったのは何時だったか…)

そんな心残りも…。

『異次元ノ狭間テ永遠ニサマヨイ続ケルガ良イ…!』 《アナザー・ディメンション／次元追放》!』

全てが光りに包まれる中、彼女たちはこの探索の始まりを思い起こしていた。



「あれが例の遺跡ね…」

アインズ・ウール・ゴウン魔導国における最高峰のアダマンタイト級冒険者チーム「蒼の薔薇」のリーダー、ラキュース・アルベイン・デイル・アインドラは眼下の荒地に広がる奇妙に細長く、曲がりくねった建造物を見下ろしながら先行して情報収集を行っていた白金級冒険者チームに確認を取った。

「しかしまあ、なんだありや? 随分おかしな遺跡だな?」

隣で遺跡を眺めていたガガーランが嘆息するように呟く。

実際見れば見るほどおかしな遺跡だ。

入り口から細長い通路が伸び、途中で分岐して小部屋に繋がっていたり袋小路を作っていたり、遠くの方には最奥であろう大広間まであるのが外から見て取れるのだ。

これはまるで…。

「まるで埋まっていた洞窟を地上に引っ張り出したみたいね…」

「ああ、そんな感じだな」

山を掘って作られた石造りの遺跡が山から全て掘り出されてしまったような姿だ。

そんなことがありえるはずがないのに。

「これが外から見て作ったマップです。壁の外から聞き耳を立てたレンジャーの話では内部に動いている生き物は居ないそうです」

壁に遮音の魔法が掛けられているかもしれませんが、と付け足した冒

険者チームのリーダーを務めているリザードマンが提供する情報に相槌を打ちながらラキユースは内心でこの世界が随分と様変わりしたことについてぼんやりと考えていた。

リ・エステイーズ王国がアインズ・ウール・ゴウン魔導国に併合されて数年。

リザードマンのような人外もまたアインズ・ウール・ゴウンの名のもと平等に統治される国家。

恐れていた圧政もなく、むしろ欲望の赴くままに際限のない搾取を行いつづけていた貴族たちが肅清されたことと魔導国が持つ強大な生産力と軍事力により王国の民は以前より遥かに向上した生活を送れるようになっていた。

これらはラナー新女王がアインズ・ウール・ゴウン魔導王との粘り強い交渉の末に手に入れた成果であるとラキユースは聞いており、ラナーの友人であるラキユースは友を誇りこそすれ王国の現状に対する不満はないに等しい。

変わったものは民や民の暮らしだけではない。

ラキユースの職業である冒険者も変わった。

国家や政治と距離をおいたモンスター退治専門の傭兵といった立場から、国家のバックアップを受けながら未知を既知へと変えるべく世界を旅する文字通り冒険し、切り拓く者へと。

現状は新しい冒険者の育成に力を振り分けられているため既に完成されたアダマンタイト級である蒼の薔薇への支援は最小限とされているが、それでも驚くほど上質なマジックアイテムやポーションが支給されアインズ・ウール・ゴウン魔導国の懐の大きさを色んな意味で思い知らされた。主に財政面とか。

実際は蒼の薔薇の構成員の1人に対して思うところのあるアインズの思惑により最低限以下の支援しかしていないのだが、その心中は蒼の薔薇の誰にも伝わっていない。

今日も冒険者たちは、未知を既知へと変えるべく冒険を進め、とある白金級冒険者チームが未発見の集落と接触。友好関係の構築にも成功しました一歩未知を既知へと変えていた。

そして、その集落の近郊にある謎の遺跡の情報を手に入れ調査に向かったのだが、そのあまりに異様な姿と遺跡に踏み込んで帰ってきたものが居ないという伝承に白金級冒険者チームの实力では手に負えない可能性があるかと判断。

アダマンタイト級冒険者チームである蒼の薔薇がダンジョン攻略隊として派遣されることとなったのだ。

先行していた冒険者達から一通りの説明を受けたあと、気になった点をイビルアイが尋ねる。

「通路の壁を破壊して内部に入ることは出来ないのか？ わざわざ馬鹿正直に入口から入ることもあるまい」

「ええ、我々もそれは試しましたよ」

リザードマンのリーダーが（ラキユースはまだリザードマンの表情を上手く読めないので多分だが）苦笑しつつ肩をすくめる。

「陛下から賜った筋力増強の力を定められたミスリルハンマーで半日ブン殴ったんですが傷一つ付けられませんでした」

リザードマンというのは想像以上に根気が強いらしい。

青の薔薇のメンバー全員がうわあよくやるなこいつどんだけ暇なんだ、というような顔をしたが、リザードマンにも人間の表情は読み辛いようで伝わらなかった。

忍者二人は実際にうわあ、と言っていたが蒼の薔薇のパーティーメンバーの耳には入るがリザードマンの耳には入らない絶妙の音量だったためそれも気付かれていない。なおこのような話術も実は忍者特有の高等技術である。無駄遣いだ。

「それじゃあ俺達がやっても無駄だな多分…」

うわあ、という顔のままガガーランが呟く。リザードマンの生まれ持った身体能力と武器に込められた魔法の力があるとはいえ、所詮は白金級。武器の質や武技まで含めればガガーランの破壊力が勝るだろうが、それでも半日かけて達成できなかった通路の壁の破壊がなるとは思えなかった。

他にも幾つかの疑問点や突破法を提案してみたが、どれも既に試しており、失敗に終わったとのことだった。

「結局正面から攻略するしかないみたいね」

「ま、ダンジョン攻略ってのはそうでなくっちゃな！」

「そうそう、ズルしようなんて無粋」

「どっかの誰かにはロマンってものが足りてない」

「お前らだつてノリノリでえげつない意見あげてたじゃないか…」

「過ぎたことを言ってもしようがない」

「過去をほじくり返すような女は嫌われる」

怒鳴り声をあげ始めたイビルアイを無視してラキユースはりザー

ドマンのリーダーに告げる。

「それでは遺跡攻略を始めます。あなた達には私達のバックアップをお願いします」

「もちろんよろこんで！」

探索は順調に進んだ。

外から作られたマップは正確であり、蒼の薔薇の戦闘力は強大であり、二人の忍者の斥候能力も確かであったからだ。

時折出現するモンスターも難度60程度であり、白金級冒険者ならいざしらずアダマンタイトたる蒼の薔薇にとっては油断せずチームワークを持って処理すれば恐ろしくない相手であった。

「動いてるモンスターはいないって聞いていたんだがなあ…」

「壁に防音が施されていたんだらう。そうそうなんでも上手くいくものでもない」

「こんな遺跡で何を食べて生きているのかしら…?」

「霞?」

「共食い?」

「斥候は集中しろ集中！」

「してるしてる」

「心配いらない」

小部屋を一つずつ調べ罫を解除しモンスターを全滅させ退路を確保しつつ、時折残されているチェストなども調べ、遺跡のマップを完全に埋めていく。

「初めて見る硬貨ね…。すごい重さ…。 交易金貨の2倍はあるかしら？」

「刻まれてる装飾も見事なもんだぜ。こりや金貨4，5枚の価値はあるんじゃないか？」

「これは…まさか…ユグドラシルの？」

「イビルアイ、どうしたの？」

「何か知ってる？」

「いや、少し記憶が薄れていて確信が持てない…。でも、もしそうだったらここはかなりやばい遺跡かもしれない。八欲王や十三英雄時代の遺物が眠っているかも」

「…本当ならかなり不味いわね…。 最奥の広間の直前まで確保したら一旦帰還して事情を説明して増援を呼ぶ？」

「…いや、大丈夫だ。私の知識と、このモンスターが強さから考えれば、私たちに攻略できない遺跡じゃないはず」

「そう…。 信じていいのね？」

「ああ、私たちなら必ず攻略できる」

「よっしゃ、うちのちびの太鼓判も貰ったことだし、気合入れていくぜ！」

そして探索は進み、最奥部の広間の扉へとたどり着き彼女たちは『魔神』を目覚めさせてしまった。

『グオオオアアアアッ!!』

「くそっ！ 何だこいつ！ やたら強いぞ！」

「ガガーラン！ 立ち止まらないで！」

「こつちを見る！ 魔神め！」

「動きを止める」

「合点承知、不動金縛りの術！」

イビルアイの予測通り、この遺跡はユグドラシル由来のものであった。

『燃エ尽キヨツ！ 《フレームバースト／炎の爆裂》！』

「あつっ！」

「ぐうっ！」

「ティア！ ティナー！」

イビルアイが持っているユグドラシルの知識の通りならばダンジョンには「げーむばらんす」による攻略適正レベルというものが存在し、そこに出現するモンスターをたやすく倒せる適正レベル以上のレベルを持つパーティであれば攻略は容易いものとなるのが普通だ。

しかしイビルアイの予測は一部外れていた。

「二人を頼む！ 《超級連続攻撃》！」

『グオオオオツッ！ ナメルナアツッ！』

「ぐあぁっ!？」

ユグドラシルユーザーに糞製作と呼ばれ親しまれ憎まれているユグドラシル製作の作ったダンジョンが全てそんな適正バランスダンジョンだけのはずがないということをイビルアイは知らなかったのだ。

「このっ！ 《サンドフィールド・ワン／砂の領域・対個》！」

『グウツ!? 何ガツ?』

「隙ありい!! 超技・ダークブレードメガイんパクト暗黒刃超弩級衝撃波オオオ!!!」

『グワアアアアアオオオツ!!!』

「やったか!？」

この遺跡はとある初級者レベルフィールドの片隅にひっそりと隠されていた、ユグドラシルにおいても未発見の「ちよつと慣れてきた初級者の足元を掬ってやるために適正レベルより少し強いボスが出る嫌がらせダンジョン」だったのだ。

『グガアアアッ！ マダダアアッ！ 《ナパーム／焼夷》！」

「くあぁっ！」

「きやうっ！」

適正レベルは30だが出現するモンスターはレベル20程度の雑魚ばかり。順調に進んだ最後に登場するのは適正レベル40の手に負えるかどうかギリギリのボス。

「く、負けるかぁっ！ 《クリスタル・ダガー／水晶の短剣》！」

『グワアアアッ！ 近寄ルナツッ！ 《フレイムバースト／炎の爆裂》！』

「がああああつっ!! ぐううっ…とどめ…だあつ!!」

『グオオオオオオツ!!』

そのボスの特性も嫌らしく運良く倒せたとしても最後の断末魔に自分の周囲半径数mの対象に対し『別の世界へと強制転移させる魔法』を使ってくるのだ。

「イビルアイ！ 魔神の様子がおかしい！ 離れて！」

「なっ!?!」

『オノレ…我が…最後ノ魔力デ…!!』

文字通り世界を股にかけて冒険するようになる中級者くらいならまだしも、初級者程度では世界移動のコストは地味に痛い。

「イビルアイ！」

「手を伸ばせ！」

「こつちへ！」

「急いで！」

「バカッ！ こつちに来るんじゃない！」

ただ、その地味に痛いコストを払わせるだけという本当にただ地味に苛つくだけの地味な嫌がらせがまさに糞製作の糞製作たる所以といったところであった。

『異次元ノ狭間デ永遠ニサマヨイ続ケルガ良イ…!』 《アナザー・デイメンション／次元追放》!』

そして…ユグドラシルではない、世界を股にかける手段などないこの世界において、『世界』から強制的に追い出されてしまったら、もはや元の世界に戻る手段はない。地味な嫌がらせなどでは済まない。

「イビルアアアアイツ！」

魔神が放った断末魔の光が収まった時、蒼の薔薇の小さな極大級魔法詠唱者の姿は跡形も残っていないかった。

「そ…そんな…イビルアイ…」

「マジ…かよ…?」

「跡形もない…」

「うそ…」

蒼の薔薇―遺跡探索依頼成功。
未帰還者―1名。



鈴木悟はバイザーの下で涙を流す。

失われてしまう思い出の地への未練を溶かして…。

「そうだ、楽しかったんだ…。」

そして、日付が変わり一つの世界は終わりを告げ悟の意識は強制排出され…。

ドスンツ!!

「ぐへえっ!?!」

なんの諸行無常もない突然の腹部への衝撃に脳内ナノマシンはエマージェンシーを発動しダイブシステムを緊急停止させる。

手順を全て無視して意識が肉体に戻った反動で末端神経がオーバードロードを起こしピリピリとした痛みが走るのに顔をしかめながらセキユリティヘルメットをむしり取りつつやけに重い膝の上に目を向けると…。

「は…?」

「あ…」

悟の膝の上で身を起こす、赤い布をまといおかしな仮面を被った子供とご対面した。

悟が困惑に硬直する中、仮面の子供はわなわなと震え…。

「モモン様あ!!」

と叫び悟の胸に飛び込み纏るように抱きついてきた。

(えええっ!?! なになに! なんかに柔らかいし温か…くはないななんか妙に冷たいし…良い匂いとかもしいし!)

「ええっと、たしかにモモンガですけど!?! どうかどなた!? どうやって部屋に入ってきたんだよ!?!」

混乱しつつも聞き取れたモモンという言葉で悟の耳は聞き慣れたモモンガと変換して脳に伝え、悟は辛うじて返答に成功する。

本当に成功だったのかは定かではない。

仮面の子供は悟の胸に顔を埋め嗚咽し始めたのだから。

「良かった…モモン様…。もう会えないのかと…。私はもう駄目なんだと…。会えて…会えて…モモン様あ…」

(えええ…ほんと誰この子…？ 俺をモモンガって呼ぶことはユグドラシルの知り合いだとは思うけど…。フレンドにこんな子居たかな…？ いや、リアルの顔知らない人もいるけど…)

謎の子供の嗚咽が響く室内で悟は、明日は4時起きだから早く寝な
きや…。などと考えつつ疲れたように椅子の背もたれに頭を落と
した。

第2話 アイちゃんリアルに居る

魔神が断末魔にあげた魔法の光に包まれたイビルアイは一瞬の浮遊感のあと、硬いような柔らかいような、というか人間の上のような感触がするものの上に墜落した。

「ぐへえっ!？」

下敷きにしてしまった男性が潰れたような、それでいてなんとなく聞き覚えのあるような声を上げる。私はそんなに重くないはずだ、という不満が心の何処かに湧き上がってくるが、とりあえず心の底に押し込める。

あの魔神の光で何が起きたのかはまだわからないが、ひとまず死は免れたようだ。

生きてさえいればどうとでもなる。長年の経験からそれを知っているイビルアイはひとまず現状を確認しようと思いを起こし…。

「は…?？」

「あ…」

イビルアイの想い人、漆黒の英雄モモンと対面した。

眼と眼があったその瞬間イビルアイの動かない心臓が爆発したかのように熱くなり、全身に電撃が走る。

普段フルフェイスヘルメットを被っているモモンの素顔を見たのは数えるほどであり、最後に見たのも随分前だがそれでも愛しい男の顔を間違えたりはしない。

「モモン様あ!!」

感極まり、モモンの胸に飛びつくイビルアイ。まだダメージが抜けきらず力の入らない身体を必死に動かすモモンの身体を抱きしめ、グリグリと体を擦り付ける。

(あゝっ！ 鎧を着ていないモモン様に抱きついてる！ 意外に細いぞ！ 硬いぞ！ 汗の匂いもする！ 温かい！ ファアアアアアツ!!)

大分頭がぶっ飛んだようだ。世界間移動の後遺症の可能性もあるが。

「ええつと、たしかにモモンガですけど!? というかどなた!? どうやって部屋に入ってきたんだよ!？」

モモンが困惑したように声を上げるのを聞きイビルアイはほんの少し冷静を取り戻す。ちなみにイビルアイの耳はモモンガですけど、という言葉をもモンですけどに脳内変換して認識した。

（いけない…こんな幸せ…もとい、嬉し恥ずかし…じゃなくてなんだっけ…）

撤回。イビルアイの頭は完全に茹だっていた。

「良かった…モモン様…。もう会えないのかと…。私はもう駄目なんだと…。会えて…会えて…モモン様あ…」

事情の説明も忘れ感極まったように胸に顔を埋めプルプルと歓喜に震えながらやたら小刻みに呼吸を繰り返すイビルアイ。

そんな様子に困惑しつつ悟は時計を見る。0時09分。正直なところもう今すぐにでも寝たい。今日は特に精神的にも弱っているのだ。

何かを考えて解決するだけの気力がない。

「とにかく、ちよつと落ち着いて」

強い口調で言う少女の肩を掴んで引き離し、奇妙な仮面と視線を合わせる。

「申し訳ないんですが。明日4時起きでもう寝ないと辛いんです。話の続きはまたの機会にしてもらっていいですか?」

悟の意識はすでにより限り界に来ていた。そうでなければこの状況で睡眠を選択はできないだろう。

だが、とにかく寝たいのだ。それをもう譲れないレベルで。

「えーと、家までは自分で帰れますか? 結構遅い時間ですけど…」

「あ、ああ、もちろんだ! こちらこそこんな時間に押しかけてすまなかった」

流星にイビルアイも眠いから寝かせてくれという切実な要求には我に返った。

事情を知らないモモンにしてみれば今の自分はいきなりやってきて睡眠を妨害した邪魔者だ。事情を聞いて欲しいという思いも少し

あつたが、幸せすぎて事情を話すタイミングを逸したのは自分だ。

自分ばかり喜んで。これではモモンの心証にはかなりのマイナス点になるだろうと少し凹むイビルアイ。

モモンの口調も以前のような気安い感じではなくなっているし…。

——プライベートな空間ゆえなのか普段の重々しい威厳ある雰囲気も減じていて、そんな姿を知れたことに関してそれはそれでお得感も感じているが。

「では、とりあえず玄関まで送りますんで…」

「あ、ああ、ありがとう…痛っ！」

床に降り立った瞬間全身に走る痛みによりイビルアイは悲鳴を上げうずくまった。

いかにイビルアイが高い再生能力を持つ高位の吸血鬼といえど魔神との死闘で受けた傷はそうたやすく回復するほど浅くはない。

悟も身体が離れたことよって初めて彼女が全身に火傷を負っていることに気付いた。

「なんですかその傷?! いや、そんな傷で何やってるんだ!？」

医療や怪我について詳しくない悟が見ても明らかに重傷だ。子供が、いや、大人であっても先程までのように平然としていられるようなものではないだろう。

「ああ、いや…私は大丈夫だ！」

痛みを引き攣りながらもイビルアイは健在をアピールする。アンデッドであり痛みなどの感覚が鈍っているイビルアイにとってこのくらいの傷の痛みは耐えられないほどではない。

むしろモモンが必死に自分を心配している様子にムニムニと口元が緩みそうなほどである。

そしてすぐに慌てた。

「ちよつと待っててください！ 何か薬を持ってきます…！」

悟は買い置き常備薬箱の置き場所を思い浮かべつつ立ち上がる。救急車を呼んだり、病院に連れていくといった選択肢はない。

社会保障など疾うの昔に消滅した2100年代ではアークロジ―外への救急車の出動には悟の月給が数カ月分まとめて消し飛ぶ程の

費用がかかるし、そこに夜間救急外来に掛かる費用も併せれば年収にも匹敵する。

常備薬でどうにかなる傷とは思えないが他に出来ることはない。

「待って！ 大丈夫だから！」

イビルアイが立ち上がって薬を取りに駆け出そうとするモモンの裾を慌てて掴んで止める。

アンデッドは治療ポーションを使われたらダメージを受けるのだ。今のダメージ状況でモモンが持っているような高級ポーションを使われたりしたらせつかく生き延びたのに最悪死ぬことになりかねない。ポーション死とか冗談ではない。

「大丈夫なワケ無いでしょそんな傷！」

たしかに。ぐうの音も出ない正論だ。アンデッド以外には。

イビルアイはとにかく止めなければと思いとりあえず思いついた言い訳を深く考えずに叫ぶ。

「私はアンデッドだから大丈夫だ！」

言ってしまうから慌てて仮面の上から口を押さえる。

「アンデッドって……」

ゲームじゃあるまいし、とモモンが呟くが自分のうっかりにシヨツクを受けて硬直したイビルアイの耳には入らなかった。

しかし、イビルアイは自分の迂闊さを呪いながらも少しずつ穏やかな気持ちが胸に湧き上がってくるのを感じていた。あるいはもうどうにでも成れというやけっぱちな感情かもしれない。

モモンは突然の告白に困惑しながらもそれ以上に気遣わしげな表情で自分だけを見つめている。

——どの道、いつかは知って欲しいと思っていたこともある。

仮にモモンが本当のイビルアイを受け入れてくれなくても、あらゆる種族が共栄する魔導国から追い出されるわけでもない。

思いがけないこの二人きりの瞬間は覚悟を決める良い機会なのではないだろうか？

「モモン様……。本当のことなんだ。私はアンデッド……吸血鬼なんだ。その証拠に、ほら……」

左手を見せつけるように持ち上げると魔力を循環させ左手の甲の傷に再生能力を集中させる。見る間に回復していく手の甲にモモンは目を見開く。

そして持ち上げた左手をそのまま仮面に掛け、仮面を外し牙が見えるように意識しながら、微かに笑った。拒絶される恐怖に怯えながら。

「あ、ああ……」

モモンは衝撃を受けたようによろめく。その動揺にイビルアイは微笑みをさらに深める。

あのモモンがこれほどの動揺を見せてくれるなんて、この姿を見られただけでも今回の件は価値があったのかもしれない。なんていうどうでもいいことが現実逃避気味に脳裏をよぎる。

だが、悟が受けた衝撃はイビルアイの考えていた衝撃とは別の衝撃だった。

(なんて綺麗なんだ……)

その少女の美しさと比べれば見る間に傷が癒えていく異常現象も些細な事に思えた。

少女の顔立ちだけではない。

紅玉の瞳が湛えた憂いや寂しさ怯えなど様々な感情と、それら全てを呑み込むような優しく切ない透明な微笑に悟は心を奪われたのだ。

そしてすぐに我に返る。

(な、何を考えているんだ俺!? こんな小さい子に見惚れるなんて……。これじゃまるでペロロンチーノじゃないか!)

色々と致命的な事態を考えないようになっつつ衝撃から気を取り直している、少女の微笑みが更に優しいものになったように感じ慌てて目をそらし、少女の身体に目を落とす。

急速再生した左手に限らず、先程までの痛々しく生々しい火傷はこの短時間の間に確かに回復している。完全回復にはまだ時間がかかりそうだが、かなりの場所は焦げた皮膚が剥がれ、その下に柔らかそうな皮膚が再生しつつあった。

そう、たとえば焼け焦げた服に空いた穴から覗いた少女の身体の内

だらかな部分とか。

「——って！ いったいどこを見ているんだ俺！ いかん、本格的にペロロンさんに毒されていたのか!？」

うつすらピンクとかそんなことを知りたかったわけじゃないんだ！ と脳内に浮かんでこつちへおいでとばかりに手招きをする鳥頭の幻影にパンチを喰らわせて追い払う。

「アンデッドとか吸血鬼とかはともかく…。まあひとまず、怪我が大丈夫ならそれでいいです…」

ため息を吐くように少し力なく言葉を吐き出す悟。

「とりあえず、ええっと…。次はどうしたら良いのかな…」

一つの問題が解決した安堵に気が抜けた瞬間、悟に猛烈な睡魔が襲いかかり、よろよろとふらつく。

あ、ヤバイ。眠い…という言葉が漏らした悟を少女が慌てて支える。

「ああっ！ すまない！ モモン様はお疲れだと言うのに私のことばかり…。寝室はここか？」

もう既に身体の痛みは無視できる程度にまで収まっている。モモンを支えながら、思ったより殺風景で粗末な寝室へと足を踏み入れ、随分シンプルなベッドにモモンを横たえる。

「えっと…その…君は…」

抗えぬ睡魔の中、おやすみなさいと囁く少女の微笑みが悟の目にまぶしく、そしてとても暖かいものとして映っていた。



寝室から退室したイビルアイは己の体を抱きしめ飛び跳ねたくなるような衝動を必死で抑えていた。

（アンデッドとか吸血鬼とかのことなんかより私の怪我が大丈夫で良かったって…!）

受け入れられたというより、そんなことはどうでもいいというニュ

アンスだったが少なくともモモンはイビルアイがアンデッドであると知ってもなんら隔意を抱かなかったということが分かった。

そしてそれより自分を心配してくれた。

嬉しすぎて身体が羽になって何処かへ飛んでいってしまいそうだ。

——と…。いかんいかん…。いい加減帰らないと…。ラキユースたちにも連絡をしたいし…)

仮面をかぶり直しつつ《メツセージ／伝言》を使用して蒼の薔薇に自分の無事を知らせられるか試してみたが、繋がらない。エ・ランテルと例の遺跡は距離がかなり離れているため仕方ないだろう。

そして《テレポーテーション／転移》を使えるほどの魔力は回復していない。

(明日の朝になったら冒険者組合に顔を出して中継による長距離メツセージを送ってもらい、魔力の回復を待つて転移で合流するか)

イビルアイは今までモモンの住む邸宅に入ったことはなかったが、なんとなく構造上外へ向かうであろうと思われる廊下を進む。

邸内だと言うのに鍵が3つもついた金属の扉に多少の違和感を覚えつつも甲高い悲鳴のような軋みを上げる扉を開いて一歩踏み出し、異様な臭気に顔をしかめた。

(なんだ？ 毒のトラップ・ゾーンか？ 館の中に?)

アンデッドであるイビルアイに毒は効かないがそれでも悪臭には顔をしかめる。本来は必要ないのだが普段から偽装の一環として常に呼吸をしているのが仇になった、などと思いつつ呼吸を止め、眉をしかめながら 《コンティニュアル・ライト／永続光》の魔道具に照らされてなお薄暗い廊下に歩を進める。

(なんだここは？ 風が流れているし屋内の空気ではないな…。中庭にでも繋がっているのか?)

少しずつ大きくなる違和感。そもそもモモンが住む邸宅の内部にしてはモモンの部屋は随分薄汚れた雰囲気があつた気がする。舞い上がっていてあまり観察出来ていなかったが。

(なにかおかしい…。床は漆喰か？ すごい硬さだ…。でもなんだ?)

この脂が混じった煤が塗りたくられたような汚れは…)

突如として見知らぬ世界に迷い込んでしまったような心細さ。先程までの浮かれた気分は冷水を浴びせられたかのように急速にしばらくでいた。

(どこの建築様式だこの建物は？ 殺風景というか、すごい無機質だ。住んでいる人を人として扱っているとは思えない…)

コツリコツリと虚ろに反響する足音。アダマントイト級冒険者が何を怯えているんだと冷静な自分が言う。

(生き物の気配がないな。人や動物はおろか、虫の鳴き声もしなければ植物の面影さえないぞ…)

——気付いた。壁や柱に木が使われていない。まるで牢獄のように無機質な鉄の扉と薄汚い漆喰の壁だけが狭い間隔で並んでいる。

(落ち着け…。誰も居ないわけじゃない。私なら集中すればここからでもモモン様の気配くらい感じられる…)

立ち止まり耳を澄まし、気配の察知に集中する。吸血鬼の鋭敏な感覚は立ち並ぶドアの向こうに数多くの人間が就寝しているであろう寝息や鼓動を察知する。

そう、モモンは巨大な邸宅に1人で住んでいるにも拘らず、とても多くの人間の気配がこの場所にはあった。

全身に鳥肌が立ったような気がした。

ここで寝ている人間たちは誰だ？ そもそも今までいたのは本当にモモンの部屋だったのか？

(馬鹿なことを！ 私がモモン様を間違えるわけがない！ 声も、姿も、仕草も、間違いなくモモン様だった！)

頭を振り、再び歩き出す。慎重に曲がり角を曲がるとようやく採光用の窓が視界に現れた。イビルアイは急くように窓を覗き込む。

そして、窓の外に広がる光景に目を疑った。

(なんだ…この街は…？)

暗い。

夜だから、などではない。吸血鬼であるイビルアイの目は闇夜を見通す《ダーク・ヴィジョン／闇視》を持っているのだから。

(まるで汚泥に覆われているようだ…)

先程トラップ・ゾーンかと思った黒い靄のような毒の大气はその街のすべてを覆い尽くすようにどこまでも続いており、空を見ることも出来ない。

街に立ち並ぶ建造物にはほとんど窓もなく、全て炭を溶かした泥水をぶちまけたかのような汚らしい雨だれ汚れによって覆われている。木や草と言った植物は一切生えていない。建物の他は油の混じった砂利を押し固めたような道と、インクを撒き散らしたように真っ黒になった土と泥に覆われた空き地が所々にあるだけだ。

命の気配などどこにも感じられない。

(ここは人が…いや。生き物が住むような場所じゃない…)

当然モモンが常駐しているエ・ランテルの街などでは断じてない。アンデッドである自分さえも鼻白むような致命的汚染に満ちた世界。

ここは…。

「私の居た世界じゃない…」

イビルアイの呆然とした眩きが腐り穢れた空気に溶けて消えた。



なお、そのころ悟は綺麗なお花畑でペロロンチーノと手を繋いで輪になって楽しく踊るといふ悪夢を見ていた。

第?話 アイちゃんメイドをやる

悟は今日も甲高い悲鳴のような音を上げる扉を開いて帰宅する。

金具が歪んでしまっているせいでどれほど油を差しても消えることのないこの音に、そろそろ部品の交換をして改善するべきだろうかと真剣に考える。

しかしそれも僅かな間だけだ。

「おかえり! サトル!」

悟の帰宅に反応しキツチンに続く扉から美しい少女が顔を出し、悟に笑顔に向けて挨拶を放った。

悟は考える。扉の軋みも彼女に対する帰宅の合図になっているのならそれはそれで良いのではないだろうか。

——悟は彼女が人間よりはるかに優れた聴覚を持っており、玄関の外にいる段階から悟の帰宅を感知していることをいまいち感覚として理解できていない。

「うん。ただいま、アイ」

玄関に電子錠で鍵を掛けゴーグルとガスマスクを外しながら悟も挨拶を返すと、イビルアイの笑顔が更に輝いたものになり、一旦キツチンに引込む。

悟はその間、玄関に置かれた棚の上に手に持っていたゴーグルとガスマスクを置きネクタイを緩めながら上着を脱ぐ。

一人暮らしの頃は部屋に入ってから脱いでいたのだが同居人が「部屋に汚れを持ち込むな!」と主張し、玄関で脱ぐルールになったのだ。上着をハンガーに掛け——これも同居人が服をそこらに放り出すなど悟を窘めて以降の習慣だ——脱いだ靴を揃えていると後ろからパタパタとスリッパの足音が近づいてきた。

「ほら、タオル」

後ろから差し出された熱い蒸しタオルで顔を拭う。この後すぐに入浴するのだから無駄だろう、と最初は思ったのだが、いざ始めると汚れとともに身体の疲れがタオルに吸収されていくようでなんとも気持ちよく、今では帰宅時これをしないということは考えられないく

らしいの習慣になってしまった。

「ああ〜」

ちよつとおっさん臭い声を上げつつ顔を拭き、軽く首筋や手も拭つてから後ろを振り返りイビルアイに汚れたタオルを返す。

「ありがとうア…イ…う？」

お礼の言葉が尻すぼみになり、驚きに悟の目が見開かれるのを見てイビルアイの顔に得意そうな笑顔が浮かぶ。

「——なにその格好…？」

頭部には可愛らしいフリル付きのカチューシャが鎮座し、ディアンドルのように胸元が大きく開いて下のブラウスが露出した黒いミニワンピースにフリルの付いた小さなエプロン。

ワンピースの下に着込んだペチコートとニーソックスが絶妙の絶対領域を作り出しているこれは…。

「ふふん、ではご主人様、入浴になさいますか？ お食事になりますか？」

それとも…私？」

なんてドヤ顔で着ている服を見せつけるように胸を張るイビルアイはなぜか、メイド服を着用していた。



とりあえず先に身体を洗ってこいと風呂場に押し込まれ（じゃあさっきの選択肢は一体何だったんだと思わなくもなかったが）汚染大気によって身体に付着した汚れをスチームバスで洗い落とし悟は、風呂場から出ると部屋着に着替えキッチンへと向かう。

キッチンに入れば、それほど大きくない二人用のテーブルに並べられた数々の料理が湯気を上げ、美味しそうな匂いを周囲に漂わせ悟の空腹をこれ以上無いほど刺激した。

しかし、やはりそれ以上に気になるのはなんかすごいドヤ顔で胸を張りメイド服を見せつけるように仁王立ちするイビルアイだ。

なんというか、その姿勢はメイドの態度なんだろうかと思うが彼女の態度がなんかでかいのはもう結構前からなのであまり気にしても

仕方ないだろう。

「あー、アイ？ その服は…」

「無駄話は後にして、温かいうちに食事になさってくださいご主人様」
取ってつけたようなメイドロールプレイでピシヤリと言われる。

なんとなく釈然としないものを感じつつも悟はそれに従ってテーブルに着き、いただきますと手を合わせて食事を始める。

イビルアイもまたテーブルの対面に座り同じように——飲食不要の吸血鬼である彼女には本来食事は必要ないため悟と比べかなり少量だが——食事を始める。

「美味しい。このスープとか特に」

「そうか、良かった。おかわりもあるぞ」

料理を褒めるとまたイビルアイが輝くような笑顔になり、悟の胸に暖かいものが満ちる。

かつては食事に潤いを求めるなどナンセンスだと断じていた悟だが、毎日イビルアイが作ってくれる温かい食事を食べるようになってそんな考えは綺麗サツパリ消滅した。

うまい食事は人生の喜びだ。間違いない。

今ではそう確信している。

そのくらいまで褒めるとイビルアイは顔を赤くしてもじもじしながら目を逸らして「言いすぎだ、こんなもの魔神と戦って旅をしていたころちよつと覚えただけで…そんな大したものじゃない」とか謙遜するのだが、アークロジの外で手に入るような粗末な合成食材でこんなに美味しい料理が作れるのは十分すぎるほど大したことがあると悟は思う。

そこも聞けば旅の途中はろくな食材もない中でちゃんと食べられるものを作ろうと試行錯誤することがよく有ったとのことだった。

こんな小さいのに（悟より遥かに年上なのだが）様々な苦勞があったのだろう。

「ごちそうさま。今日も美味しかったよ」

「お粗末さま。私は食器を洗うから先にリビングに行っていてくれ」

「わかった、ありがとう」

片付けをイビルアイに任せリビングに足を運び、小さな二人掛けソファーに身を預ける。

「はあ〜」

それほど高級なソファーではないが、それでも柔らかなクッションの上に身を投げだすと心身の疲れが癒されていくのを感じる。

しばらくはそうやってぐったりしていたがやがて身を起こしソファーの前に置かれた小さなテーブルに目を向けると…。

「——んなあつー！」

目ん玉が飛び出すほど驚いた。

そのテーブルの上には『女の子と同居するにあたって所持していることは不適切だけど処分するには思い入れもあつて惜しいので見つからないように隠しておいた幾つもの書籍』が並べられていたのだ。(まさかつー！ ペロロンチーノ考案の『ねーちゃんにも見つからないエログッズ隠蔽術』が破られたのか!?)

驚愕に震えながらもとりあえずテーブルに並べられた書籍類を精査し、若干の安堵とともに浮かしかけていた腰を再びソファーに落とす。

(よかった…。まだこれは囿に置いておいたそこまでやばくないコミック類だ…。と言うかホワイトブリムさんが描いたメイド漫画だよ…。アイはこれに影響を受けたのか?)

イビルアイの謎のコーデイネイトに合点がいった悟は疲れたように頭をソファーの背もたれに預け目元を覆った。

(俺がメイド服好きとか勘違いしたのか？ まあ嫌いじゃないけど、ホワイトブリムさんほどじゃないんだよなー)

まあアイのメイド服姿はすごく可愛かったけど…。などと独りごちつつくつろいでいると洗い物を終えたイビルアイが非常にウキウキとした様子でリビングに入ってくる。

いつものようにソファーに腰掛けるのではなく悟の横に立ちまたドヤ顔で胸を張る。

「その服装は、この漫画見て用意したの？」

「ああ！ サトルはこういうのが好きなのかと思つてな！」

似合う？　と言つてその場でポーズを取るようにくるりと回るイビルアイ。ひるがえつたペチコートから覗く生足がちらちらと非常に不味い。

モモンガさくくんこつちへおいでくとペロロンチーノとホワイトブリムが肩を組み、笑顔のエモーション全開で手招きしている幻影を《ツインブーステッドペネトレートマジック・グラスプ・ハート／魔法二重位階上昇抵抗難度強化・心臓掌握》で即死させ追い払う。青少年のなんかは守られた。

「すごく似合ってるよ。けどそんな服持ってたっけ？」

疑問に思う。イビルアイはそれほど多くの服を持っているわけはなかったはずだ。そもそも『お洒落をする』などというものはこの世界でもイビルアイがかつて暮らしていた世界でも贅沢行為だ。

意外とケチくさいイビルアイが悟に黙って服を買うとも思えない。「もちろん、自分で作ったんだ。カチューシャはハンカチだし、エプロンはテーブルクロスを畳んでそれっぽくして……」

ちまちまと種明かしをするイビルアイの工夫に、はく……と感嘆のため息をつくしか出来ない悟。よく考えている。

「結構見れたものだろう？　もしサトルが望むなら、もつとしつかりこういう服を用意してもいいが……」

悟の隣にちよこんと腰掛け、上目遣いで悟を窺うイビルアイ。可愛い。

「あー、うん……。いや、実はその本は俺の友達が描いたものでその誼で持っていただけなんだ。俺がそういうメイド好きつてわけじゃなくて。もちろん嫌いってわけじゃないんだけどさ。その漫画を描いてる人ほど情熱的に好きなわけじゃ……」

ちよつと早口になりながら言い訳を並べる。イビルアイのメイド姿は実際ドキドキするほど可愛いのだが、このままの姿で居られるとなんというか、精神的に何か危険な事態が起こりかねない。

課金アイテムを使って復活したペロロンチーノとホワイトブリムが小粋なステップを踏みながら、モモンガさくんいい加減認めちゃいなよと俺達の仲間になろうよと手招きする幻影に《ツインブース

テッドペネトレートマジック・トゥルー・デス／魔法二重階上昇抵抗難度強化・真なる死』を与えて追い払う。青少年のなんかは守られた。

言い訳を受けたイビルアイは少し恥ずかしそうに顔を赤らめ口元に拳を当てながら、なにやらちよつと覚悟を感じさせるような口調で恐る恐る口を開く。

「じゃ、じゃあやっぱり…こういうののほうが好きなのか？」

そう言つてそつと持ち上げた手には異様に肌色の多い幼気な美少女メイドが描かれた大きなプラスチックの箱『イケない《自主規制》メイド《自主規制》歳 くご主人様♥それ以上《自主規制》私♥《自主規制》ちやいます♥く 初回生産限定版』が掴まれていた。

「ぶあつはあー!?!」

盛大に吹き出す悟の視線から自らの身体を隠すように抱きしめながらも恥ずかしそうな声でイビルアイが囁く。その瞳には怯えだけではなくちよつとした決意のようなものも滲ませていたり。

「さ、サトルがこういうことをさせて欲しいなら…。どうしても我慢できないって言うなら私だつて、サトルには世話になつてるし感謝もしてるし…。い、嫌とは…嫌とは言わない…ぞ…?」

どんだん尻すぼみになり最後の方は真つ赤になつた顔を手のひらで隠しながらゴニョゴニョとほとんど口の中だけで喋つてるような状態になつていたが、そもそもゾンビのように湧き出して自分を毒の沼地に引きずり込み仲間に加えようと襲いかかるペロロンチーノとホワイトブリムの幻影と精神世界で戦う悟には最初の方からもう聞こえていない。

「ごかつ! 誤解だアイ! それも俺が好きなのじゃなくて! その、友達が! 俺にっ!」

「友達が…? サトルの友達つてみんなこうなのか？」

メイド漫画とエロゲーに目を向けながらイビルアイが何かヤバイものを見たような目で悟を見る。

「類は友達になるつて言うし…」

「違う! まともな友達だつて居たよ! それは、その本当にその二

人が例外みたいなもんで!!」

大声で否定する悟。例外なのかは実際疑わしいが。

「…本当に私にこういうことしたいわけじゃないのか？ その…男と
いうのは溜め込むといけないと聞くし…。どうしても無理なら無理
しなくていいんだぞ？」

「してない！ 俺はアイにそこまでしたいとは思ってない！」

「ぞ、そうか…。それなら良かった…」

ほう、と安堵のため息を吐き己の身を抱いていた腕を下ろすイビル
アイ。その本当に恐ろしいものから解放されたというような態度に
悟は妙な罪悪感を覚えながらも内心声が枯れるまで旧友をひどく汚
い言葉で罵っていた。

少女は少しおどおどしながらも、しっかりとした大人びた感じで応答する。

「名前は、イビルアイです。勝手に入ってきたことは本当に申し訳ない。とても込み入った事情があつて…。話すとき長くなる…」

「イビルアイ…？」

イビルアイ、イビルアイ…と呟きつつ記憶を当たるが聞き覚えがない。

「込み入った事情というのを聞きたいところなのですが、ちょっともう時間がないんですよ…」

「どうやって『帰ってくれ』と伝えればいいのか悩む。そもそも子供をこんな時間に追い出して大丈夫なのだろうか。」

「あ、ああ…。それは…その。…こんなことをお願いできる立場じゃないのはわかつてますが…。それでもお願いします！ しばらくこの家に居させてください！」

突然の頼みに悟は面食らう。

「い、いきなり何を？ それに昨日は帰るつて…」

「…実は…帰る場所が無くなってしまったんです…」

無くなるつてどういうことだ、と思つたが、もう本当に時間がないので問答したりする余裕はなく、もはや受け入れるか追い出すかの二択である。

しかし青ざめた顔で継るようにこちらを見上げる美少女を前に出ていけ、と告げるには悟の精神強度が足りてない。

だが、見知らぬ人間を家に置くなどというのは防犯から考えて言語道断だ。このまま出勤して家に帰ってきたら家の中がもぬけの殻なんてこともあり得る。

どう言えばいいか悩み視線を彷徨わせると、今更ながらイビルアイの火傷が完全に癒えていることに気付く。

傷がこれほど早く癒えるなどありえない。あの火傷が夢でなかったと言うなら、イビルアイは本当に人間ではないのだろうか。

服の破れ目から見えるささやかな盛り上がりやきめ細やかな白い肌にも、その頂にあるかすかな膨らみにも火傷の痕は一切残っていない。

い。

「あっ！」

視線に気づいたイビルアイが恥じらうように慌てて胸元を隠し、悟も慌てて目をそらす。気まずい。

短い沈黙の後、気まずい罪悪感と、これ以上の時間をかけると朝飯を摂れないくらい時間が差し迫っている事に気づき悟は繕うように声を上げる。

「わかりました！ とりあえず帰ってきたら事情をちゃんと聞くんでそれまで家に居て下さい！」

身体を隠したままのイビルアイがはっと顔を上げその目をまんまに見開く。信じられないようなものを見たかのように。

「ほ、本当に良いのか？」

「もう良いも悪いも判断する時間がないですし。とりあえずキッチンで待ってて下さい。着替えてきますから」

表情を明るくしたイビルアイをキッチンに送り、自分は顔を洗うのを諦め、外出着に着替えるために寝室に戻り衣装棚から服を取り出しつつポツリと呟く。

「帰る場所が無くなってしまふのは寂しいもんな…」

一瞬だけ、痛みを堪えるように悟の顔が歪むが、それを無視して着替えを終えると、シャツをもう一枚取り出してキッチンへと向かう。

キッチンで所在無げに佇むイビルアイにシャツを押し付けてとりあえず着るように言うと、旧式の冷蔵庫を開けてパック入りの液状食料と栄養ドリンクを2セット取り出す。

「どうぞ。昼も食べるならその冷蔵庫の中のもの食べていいですから」

「え？ あ、ありがとう」

イビルアイはしばしパック入りの液状食料を変なものを見るような目で眺めていたが悟がストローを刺し死んだような目で内容物をすすり飲むのを見てイビルアイも真似するようにストローを突き刺すが…。

「うわっ!？」

パックを強く握りすぎていたためか、ブシュツと音を立てて『液状食料クリームシチュー味』がストローから吹き出しイビルアイの顔に掛かる。

「あー、大丈夫ですか？ 目には入らなかった？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

手で顔を拭おうとするイビルアイにタオルを渡してやる悟。

その見た目相応に子供っぽいアクセシビリティに少しだけ心が緩み緊張感が和らぐのを感じる。

顔を拭い終えたイビルアイが液状食料をすすり顔をしかめるのを見ながら自分も『液状食料みそ汁味（豆腐）』を飲み干し、栄養補助の錠剤を栄養ドリンクで飲み込むと、残ったゴミをゴミ箱に捨てる。

微妙な顔で液状食料をすすっているイビルアイに部屋の間取りや触って欲しくないもの、自分の帰宅予定時間などを伝えるともう出勤しなければいけない時間になってしまう。

「それじゃ俺は仕事に行ってきますんで。えーと…」

「あ、ああ。大人しくしているから安心して下さい。えーと、行つてらっしゃい？」

「え、うん。行つてきます」

なんともぎこちない挨拶を交わし、ゴーグルとガスマスクを身につけると家を出る。

風と重金属酸性雨よけの通路を進み、ちらりと窓から外の空を見る。まだ朝の4時過ぎということもあり、空はまだ真っ暗だ。

複合携帯機から今日の天気やニュースを軽くチェックする。天気は晴れ。世界中には様々なテロや紛争が溢れている平常通りの日常だ。

「晴れ、ね…」

悟は僅かに顔を歪めながら呟く。多種多様な有毒化学物質を含んだ汚染大气による黒い雲に覆われたこの空が晴れなのだという。

「青い空なんて資料写真かユグドラシルでしか見たこと無いもんな…」

そしてもうユグドラシルの青空を見ることは出来ない。

「新しいゲーム…。ユグドラシル2か…」

今までは他のゲームの情報を遮断していたが、もうその必要もなくなった。

ユグドラシル2の噂など聞いたことが無いが、新しいゲームを始めても良いだろう。

ズキリと胸が痛む。

「やるとしても、次はずっとソロかな…」

ユグドラシルのように情熱を捧げるプレイはもう出来ないだろうし…。

そんな暗い思考を駅に到着したことで打ち切る。

改札を抜けてホームに入れば5時前という早朝にも拘らず多くの出勤者でごった返している。駅のホームにも電車の車内にも空気清浄機など設置されていないので、皆ゴーグルとガスマスクを着用したままだ。

「あの子のことはどうしたら良いかなあ…」

電車を待つ間、イビルアイのことを考える。

警察に任せるというのは出来れば選択したくない。

警察に何かを頼むために必要な手数料と賄賂の額は悟の収入から考えるとポンと気軽に払えるものではないし、仮に十分な賄賂を払ったとしても下層階級の悟の依頼でまともに動いてくれるかも分かったものではない。

金だけ取られて音沙汰なしということも普通にありうるし、イビルアイのような美少女の問題となるともつと嫌な結末に終わる可能性もある。

「帰る場所がないってなあ…。おまけに吸血鬼？ うーん…」

電車がやってきて、既に満員に近い車内に詰め込まれるかのようになだれ込み、周囲からの圧迫に耐える。

(まあなんにしろ、家に帰って話を聞いてからか…)

とりあえず思考に一段落をつけると、これから始まる長い仕事時間に対し気持ちを切り替えた。



一人になったイビルアイはザラザラとかズルズルして飲みにくい味の濃い粥のような朝食をようやく食べ終え、一緒にもらった栄養ドリンクの蓋を開けようとするが、うまくいかない。

「何だこれ？」

しばらく四苦八苦していたが、無理をしてこじ開けてさっきのようにこぼしてしまっても面倒だと思い諦めて投げ出す。

そもそもイビルアイに飲食は必要ないのだから。

「とりあえずどうするか…」

少し興味本位に冷蔵庫を開いてみる。よく見ればここには口だけ賢者が考案した道具が数多く置いてあるようだ。

「こればかりか…」

冷蔵庫の中には先ほどイビルアイが貰ったのと同じようなパックが転がっているばかりで他には何も入っていない。

「この辺ではああいうのが主食なのか…?」

一つ手に取る。パックには文字で何やらかかかれているが、どれも王国や帝国で使われている文字ではない。

しかし…。

「す、て…え? き…かな? ステーキすてえき? んん? これがステーキ?」

見た目からもうイビルアイの知るステーキ、厚切り肉の鉄板焼きとは似ても似つかない。感触から中身が液体であることは間違いないし。

さきほど食べたものの表示も読んでみる。

「ええと、くり…い…む、…し…ち…ゆう? ドロットした煮込み料理くりいむ・しちゆう」

こっちはまだ理解できた。たしかにドロツとしていたし、何かを煮込んだ料理だった。冷たくて食べにくかったけど。ステーキが何かの間違いなのだろうか。

ゴミ箱に近づきモモンが捨てていったパッケージも拾い上げるが、

こちらはイビルアイには読めない文字のほうが多い。

「み…そ…。みそ…みそみそ…。該当する言葉はないのか？ それとも全体の一部だけなせいか…。しかしやはりここはユグドラシルか、りあるという世界なんだろうな…」

イビルアイはかつて十三英雄と旅をした時に世界の外『ユグドラシル』と『りある』の狭間から転移してきたという『ぷれいやー』から様々な話を聞いていた。

長い孤独を過ごし当時は外見相応程度の精神的発育しかしていなかったイビルアイは彼らから様々なことを教わったのだ。りあるのこと、ユグドラシルのこと、その世界で使われる文字の一部など。

ひらがなとカタカナ、そして数字は今でもまだなんとか覚えている。

「毒と瘴気に覆われた世界か…。ユグドラシルにもあつたと聞いた気がするが、どちらかといえばりあるの世界のような気がするな…」

それにユグドラシルは消滅してしまったとも聞いている。

りあるの世界…。ぷれいやーたちはりあるについて随分嫌な感情を持っていたようだった。

上から下まで物理的にも文化的にも人間的にも環境的にも腐つてるとか、まあ言いたい放題。

——詳しく聞こうとすると、もうどうでもいい思い出したくない、と打ち切られてしまうのであまり深いところまでは知っていないが。「私もぷれいやーのように、あの魔神の魔法でりあるに転移させられてしまったのか？」

もしもあの魔神をぷれいやーと一緒に発見できていれば、彼らはりあるに帰ることが出来たということだろうか。帰りたい、とは一度も聞いたことがなかったが。

しかし疑問もある。

「じゃあなんでモモン様がりあるにいるんだ？」

モモンも自分と同じように飛ばされた、というのはありえないだろう。

第一、自分のことを知らなかったではないか。仲がいい、とまでは

言わないがそれでもかつて肩を並べて戦ったこともある自分を忘れることはあるまい。

「別の世界のモモン様、というところだろうか…」

かつてぶれいやーの一人がりあるでの知り合いにそっくりな人を見つけたと騒いでいたときにそんな話があった。

意味はあまり理解できなかったが。

彼が別世界のモモンなら自分とは初対面。この世界にイビルアイの寄る辺は存在しない。

「ここに置かせてもらえないだろうか…」

モモンの顔であるということ差し置いても彼は信用できそうな気がした。怪我をした自分を必死で心配したり、自分に服を与えたり。

「私の身体に興味があったようだし…。そこも利用できるだろうか…」

服の上から無い胸を軽く持ち上げてみたり。

打算的に自分の身体を利用するなどイビルアイにとって最も唾棄すべき事だったはずなのに何故か不思議と嫌悪感がわかない。冗談のつもりだったのに。

（モモン様と同じ顔だから？ 私はそんなに軽い女になってしまったのだろうか…？）

なんだかあまり愉快的思考でなくなってきたので考えを打ち切る。

——しかしイビルアイの直感はあるのモモンと自分の知るモモンが非常に近い存在であると訴えていた。

まだ手に持っていたパツクをゴミ箱に捨て、イビルアイはリビングへと移動する。

立派な椅子に小さなテーブル。そしてよくわからない下半分しか無い黒い杵が乗った台くらいしか置かれていない殺風景な部屋だ。狭い。

椅子を少し隅に寄せてスペースを作るとイビルアイは床に座り込んで懐から無限の背負袋を取り出す。無限と名前がついているが容量は総重量300kgまでという制限があるし、背負袋と言いが

らもイビルアイが持っているものはそれほど大きくないポシエットの形をしていたりする。

そこからボロボロになった服の替えや、魔神戦で消費した消耗品を取り出し身につけていく。

「まあこんなもんか」

一通り揃えると満足げに一息し、ポシエットの中身を整理、確認していく。りあるでアイテムが補充できるかわからない以上、この中身がイビルアイの生命線になるかもしれない。

スクロールやマジックアイテムなどのイビルアイが使うためのアイテムだけでなく、仲間を使うためのポーションや仲間が使うための装備の予備なども入っている。誰かがトラブルで所持品を失った時パーティで補い合うためのものだ。

魔神戦での消耗は大きいが、ダンジョン攻略前に物資を十分に補充していたこともあり直ちに不足しているようなものはなかった。しばらくは大丈夫だろう。りあるがどの程度危険な世界なのかにも拠るが…。

「こつちも一応調べておくか…」

もう一つの無限の背負袋インフイニティ・ハザアザックを取り出す。

こちらは総重量150kgまで収納できるもので、普通に背負袋の形をしている。

ポシエットはイビルアイの私物だが、これは一人前の冒険者に対して冒険者組合から支給された『冒険者基本キット』だ。

イビルアイはあまり使っていないが、中には冒険者が未知の世界を踏破するために必要な多種多様なグッズが揃っている、という触れ込みだ。

私には必要ない、と持ち歩くことを渋っていたのだが、こうなっては持ち歩いていて正解だったといえるだろう。

「うーむ、本当に色々入っているな…」

保存の魔法がかかった棒状の堅パン、火打ち石に火口箱、鍋、方位磁石、包帯、楔、ロープ、筆記具、チョコレート、鉄釘、スコップ、毛布、狼煙のための燃料などの基本的なツールだけではない。

砂糖、塩、胡椒、カ・レエ・コ、油などの香辛料を1日100gまで生み出す香辛料の瓶ペッパーボックスや低品質なワインを1日1リットル生み出す無限のワイン瓶インフィニティ・ワインボトル。

——この辺りの物は冒険者自身が使うための物でもあるがそれ以上に未開の地で出会った現地民などに対して歓心を得るために贈り、友好関係を築くきっかけにするための道具であるという面も強い。

新鮮な水を1日100リットル生み出す湧き水ボトル・オフ・スプリングウォーターの水筒、1日に3回までたいして美味くない食料を生み出せる非常用弁当箱エマーゼンシー・ランチボックスが主食、主菜、副菜の3種類で3つ、火がなくても煮炊きできる鍋スイ・ハ・ンジャー、蓋を外すと底に火が灯り網の上で物を焼いたり出来る植木鉢のような形をしたシ・チリン、箱を組み立てると魔法で中の空間が広くなり雨風を凌ぐシエルターとして使えるダン・ボル・バコ等々、昔ならば一つでも一財産になるようなマジックアイテムまで。

どんな遭難状況でもとりあえず死ぬ危険を無くせるようなものが数多く揃っていた。

「これが最低限というのだから恐れ入る…」

——この中身を決めるためにアインズ・ウール・ゴウン魔導王が随分口を出したと聞いているが、なんとはや、どれほど徹底的で几帳面で心配性なのやら…。

とりあえず全てを元通り背負袋にしまい込み確認を終える。

懐から懐中時計を取り出して見ると針は昼過ぎを指していた。

「意外に時間が掛かったな…」

この世界でも同じ時間が流れているのだろうか？ などという疑問も感じたがまあとりあえず指標にはなると思い懐に戻す。

聞いた話からまだモモンが帰ってくるには時間があるだろう。

装備の確認が済み人心地ついて落ち着いたイビルアイの胸にりあるとはどんな生活を送っているんだろうかという好奇心がむくむくと湧き上がってくる。

「少しくらいなら良いよな…？ 変に弄ったりするつもりはないし…」

——イビルアイの名誉のためにも探検の詳細な描写は割愛する。

ベッドを見てモモン様のベッドー！ などと叫んで潜り込んだり、溜め込まれていた洗濯物に鼻を近づけて汚染大気の悪臭に顔をしかめて後悔したり、バスルームでシャワーのスイッチを間違って押ししまつてびしょ濡れになったりと、その程度のことである。

ほうほうの体でキッチンに戻ったイビルアイはため息をつきつつキッチンの様子を眺める。

ろくに使用した形跡がない。

「…そうだな…。うん悪くないかも」

ふと、何かひらめいたイビルアイはその思いつきのまま無限インフイニティ・ハザアザックの背負袋から幾つかのものを取り出して並べると、満足げに頷いて作業を始めた。

第4話 アイちゃん悟と話し合う

いつもの通り疲れきった体を引きずり、悲鳴のような軋み音を上げる玄関扉を開けて帰宅する悟。

扉に3つの鍵をかけ、ボロボロの靴を脱ぎ散らかしのろのろと廊下を歩く。

「疲れた…」

ユグドラシル最終日だからと無理して有給を取った埋め合わせにいつも以上に濃いスケジュールで仕事をしたのだ。

いつものように、いや、いつもと比べてはるかに重い足取りでキッチンへ向かおうとすると、悟が扉に手をかける前にキッチンの扉が開く。

「おかえりなさいー!」

中から金髪の美少女が出てきてこれには悟も思わずびっくり凝固。

長く苦しい仕事時間の間にすっかりイビルアイのことを忘れていた悟である。

「えっと、ただいま…です…」

マスクとゴーグルを外しながら返事をする。ユグドラシル以外で、いや、ユグドラシルを含めてもただいまなどと言ったのは何時以来だろうか。

悟の胸中にむず痒いような暖かいような何とも言えない感触が湧き起こる。

そんな悟の感慨に気付かず、イビルアイは悟を見上げながら言葉を続ける。

「実は簡単にだけど食事を作ってみたんだけど…。事情を話す前に軽く食べますか?」

「えっ?!」

イビルアイの頭越しにキッチンの中に目を向けるとろくに物が置いていかなかったはずのシンクの調理スペースに見覚えのない鍋や調理器具のような物が置かれ、買った覚えのない木のお皿なども置かれている。

「え、アレ…。どこから？」

悟の不明瞭な疑問にイビルアイは少し楽しげに答える。驚愕している悟の様子が面白かったらしい。

「大丈夫…です。全部私が目意したものですから。モモン様の物を勝手に使っていたりはしませんので」

「ええ…。それでもどこから持ってきたの…」

呆然とした悟のつぶやきに合点がいったというふうにいビルアイが頷く。

「ああ、無限インフイニティ・ハウアザツクの背負袋に入れてあったものです。魔導国の冒険者の基本キットとして」

いきなりユグドラシルゲイムの単語が出てきて面食らう。

そんな便利なものが現実に…。

「ほら」

あった。目の前に。

さして大きくない分厚い布製の袋の中からズルーツと大きなスコップが出てくる。

手渡され悟もやってみる。手品ではない。

呆然としながら背負袋を弄る悟にいビルアイは呆れたように声をかける。

「さて、食事の前に風呂に入ってきたほうが良いんじゃないか？ あまり清潔とはいえない感じだし」

「うぐうっ!？」

イビルアイ美少女のお兄さん不潔！ 攻撃。悟童貞にクリティカルヒット！

（いや、実際外出したから汚染大気で汚れてるというただの事実の指摘なはずだっ…!）

「わかりました…。身体を洗ってきます…」

なんか覇気がなくなつた様子に不思議そうな顔をするイビルアイに見送られバスルームに向かう悟。

脱衣所で服を脱ぎながら困つたように呟く。

「なんか、調子狂うな…」

しかし、その顔に曇りはない。

様々な意味でびっくりするような他人に振り回されるこの感覚。悟はそれが嫌いではなかったのだから…。



スチームバスで身体を綺麗サツパリ洗い終え、部屋着に着替えた悟は微かに湯気を上げながらキッチンに戻るとイビルアイがリビングへと料理を運んでいた。

「お、早かったな…ですね？」

「もう敬語は無しでいいですよ。敬語が下手なの分かったんで…。その代わり俺も敬語は無しで話すから」

使い慣れていない敬語を聞いているのも精神が疲れるのだ。

イビルアイの幼い容姿も合わせて社会人になったばかりの自分を思い出してしまう。

「そ、そうか？ わかった、じゃあそうする」

少し肩の力が抜けた様子のイビルアイに続いてリビングに入ると、椅子と小物を置くキャスター付きテーブルくらいしかなかった部屋に野営時に使う高さ30cmほどの簡易テーブルが置かれ、その上に悟が今までリアルではお目にかかったことがないような料理の数々が並べられていた。

「簡単なものだが…」

「これで簡単だったら俺が今まで食べてきたのは土と泥だな…」

「大げさな…」

呆然と大げさなことを呟く悟にイビルアイは苦笑する。

イビルアイの作った食事は非常用弁当箱エマージェンシーランチボックス（主菜）から出てきた内臓も小骨もないまるまる太った大きな魚にカ・レエ・コを擦り込んで焼いたものと非常用弁当箱（副菜）から出てきた豆と葉野菜を使ったスープに非常用弁当箱（主食）から出てきた丸っこいパン2つ。そして無限のワインインフィニティ・ワインボトル瓶から銀のマグカップに注がれたワインである。

イビルアイの目で見れば初級〜中級程度の冒険者の冒険中に食べる食事としてはそこそこ豪華と言った程度だろう。

正直蒼の薔薇の冒険中に出てきたら皆ががっかりするレベルである。イビルアイは食べないので関係ないが。

しかし悟にしてみればこのような料理は、ゲームやテレビの中で見ることが出来なかった、味の想像もつかない非常に豪華な食事である。

「色々話したいこともあると思うが、せつかく作ったんだ。ひとまず冷める前に食べてみてくれ。味は悪くはないと思うんだが…」

「あっはい…」

客人が家主をもてなすという少々あべこべな状況を気にかける余裕もない悟が言われるがまま腰を下ろし、イビルアイもその対面に座る。

「あの、貴女の分は？」

悟が見る限り料理は一人分しか無い。

「私は食べなくても平気だ。吸血鬼だからな」

食べられないわけじゃないんだが、と続けるイビルアイの返事を受け、悟は食事に手を付ける。

とりあえずパンに手を伸ばす。手にとって見ると焼き立てではないのか暖かくはないが——そもそも魔法で生み出されたため暖かかった時がないのだが——表面の硬い感触と、手に少し力を入れると表面が破れ柔らかい弾力が伝わってくる。両手に持つて力を入れ2つに裂くとバリッと音を立てて褐色の皮から真っ白な中身が覗きふんわりと焼いた小麦の甘い香りが漂う。

「はぐっ」

恐る恐る口に入れ噛みしめると、口いっぱいには香りが広がる。そのまま何度も噛み砕くとパンと唾液が混ざり合い、普段摂取している人工甘味料の甘みとは全く違う、自然で暖かな甘みが舌の上をじんわりと覆い尽くす。

「う…美味しい…」

またイビルアイが、大げさな反応を…。などと呆れ顔をしているのに気付かないまま、悟は続いて魚をターゲットに定める。

銀のナイフとフォークを手に取り不器用な手つきで魚を切り分け

——尾頭付きの魚など生まれて初めて食べる悟には背骨以外に骨も内臓もないこの異様な魚に疑問を感じることもなく——フォークで突き刺し口に運ぶ。

真つ先に感じたのはカレー粉のスパイシーな刺激だ。液状食料カレー味などでカレーの味を知っている気になっていた悟だったが、所詮合成されたカレー味などただのまがい物だったと思いつき知らされる。多種多様なスパイスが織りなす複雑な味の広がり引き立てられるように魚肉の脂と旨味が力強く存在を主張する。

続けてスープにも口をつける。強めの塩気と胡椒の辛味と香りが味を主張する中に煮込まれた豆と野菜の甘さと柔らかさが舌の上で味のハーモニーを織りなす。

ワインを口にすれば今までどうしても避けられない付き合いなどで飲むことがあった合成アルコールに色と香りをつけただけの安酒が何だったんだと思えるような柔らかく自然な渋味と酸味が合わさった優しく芳醇な味わい。

どれもこれも、悟にとつて未知の、そしておそらくはこんな事態でなければ永久に無縁な味覚であった。

最初はセーブして食べていた悟だったが次第に抑えが利かなくなりガツガツと食べるようにかき込み始める。

イビルアイはおかわりのスープを注いでやったり、弁当箱にパンよく出ろくと念じながらおかわりのパンを取り出してやったりして悟が満足するのを待つ。

そして魚を食べ尽しスープを2回もおかわりした悟が、息を吐いてようやく手を止める。

「あゝ、こんな風にお腹いっぱいになるまで食べるなんて初めてかも……」

少し膨れた気がするお腹をさすりながら悟が呟き、イビルアイに向き直り居住まいを直す。

「とても美味しかったです。えーと、なんというか。ごちそうさまでした」

そう言つて頭を下げる悟にイビルアイが慌てたように手を振る。

「そんな、かしこまって礼を言われるようなことじゃない！ 私が勝手にやったことだし。大げさだ」

「いえ、そんなことないです。こんなに美味しい食事を食べたのは生まれて初めてでしたよ」

冗談でも誇張でもない。

悟は今まで天然モノの素材を使った食事など一度も食べたことがなかった。

今まで食べたものの中で一番いいものでも会社で強制参加させられたイベントの時食べたバイオ食品の中落ち形成モノと言ったレベルである。

今日食べた食事と比べるのもおこがましい。

そんな悟の真摯な感謝の言葉に照れたのかイビルアイは顔を赤らめると片付けてくる！　と言って慌てたように食器をまとめるとキッチンへ引っ込んでしまった。

「あゝ、美味かった…。でもこれから話し合いか…」

ぼんやりとユグドラシルと一緒に遊んでいたメンバーの言葉を思い出す。

「戦いは始まる前に終わっている、だったか…」

戦う前にどれだけ自分だけ自分に優位な状況を作り出せるかが重要という意味らしい。

その観点で言えばイビルアイには圧倒的優位に立たれてしまっていると思っただろう。

こんな料理を食べさせてくれておまけに可愛いとか、もう悟が彼女に対して強く出ることなど出来はしない。

「まあいいか…。人間関係は勝ち負けばかりじゃない」

悟が彼女に要求したいことがあるわけでもない。

気楽に行こう、などと考えてしまっているのも満腹になって気分が落ち着いている証拠であった。



ベッパ―ボックス
香辛料の瓶から出したお茶っ葉で淹れたお茶をテーブルの上に並べ、イビルアイは真剣な面持ちで悟ると向かい合う。

「こんなことを言っても信じてもらえないと思うが…。私は多分、違う世界からこの世界に来たんだ」

「ああ、うん。そうだと思った」

昨日の夜の段階で言われても信じなかっただろうが、見て、触って、食べてしまった今はすんなりと受け入れることが出来た。

「でもそれならなんで俺をモモンガって呼んだんだ？」

異世界の人間がなぜ自分を知っているのかわからない。

しかしイビルアイは今の言葉に聞き逃せない差異があることによりやく気づいた。

「あれ？ モモンガ…？ モモンではないのか？」

「いや、モモンガだけ…？ モモンガって呼ばなかった？」

「え？」

「え？」

首をかしげる二人。

ひとまずそこは柵に上げて話を続けることにする。

「とりあえずモモンの話は後でするとして。私はアインズ・ウール・ゴウン魔導国の冒険者で…」

「アインズ・ウール・ゴウン!？」

素っ頓狂な声を上げる悟にイビルアイが驚いてまた話が止まる。なかなか話が進まない。

「あ、ああ…。アインズ・ウール・ゴウン魔導王が統治する国家、アインズ・ウール・ゴウン魔導国だ」

驚愕に目を見開き続ける悟。何かヤバイことを言ったんだろうかと不安に思うイビルアイ。

「ちよつと、そのアインズ・ウール・ゴウンの話を詳しく聞かせてくれ！」

「え、ああ…」

気圧されるようにイビルアイはアインズ・ウール・ゴウン魔導王について知っていることを話していく。

数年前に突如として現れたアンデッドの王である魔導王が王国と帝国の間で行われた戦争で力を見せつけエ・ランテルに建国。破竹の勢いで周辺国を平定していく天下布武のサクセスストーリーである。

悟が魔導王の外見にやけに食いついたが、その後の凄まじい偉業の数々を聞くうちに、あーまあそうだよなー俺と関係あるわけないかーみたいな顔になっていった。

いくら見た目は自分のアバターにそっくりでも、こんな優秀な人間(？)が自分と関係があるとは思えない。何かの偶然の一致だろう。

一通り話を聞いた悟は後頭部のジャックにプラグを突き刺し、手を動かすとテレビをモニターモードで起動させる。

テレビが突然起動したことにぎよつとしたイビルアイだったが、それも悟が何か操作をした結果だと知り警戒を解く。何らかの魔法道具なんだろう、と。

「そのアインズ・ウール・ゴウンってもしかしてこんな姿だったりした？」

そう言つて悟はテレビにゲーム内で撮影した自分のアバターの写真を写す。

「…たしかに魔導王だ。なぜ彼の姿が…？」

驚いた様子のイビルアイにかすかに誇らしげに悟が答える。

「これが俺の『モモンガ』だ」

「俺の…？」

今度は悟が説明を始める。

ゲームのこと、ユグドラシルのこと、モモンガという名前とテレビに写した容姿でプレイしていたこと、アインズ・ウール・ゴウンというギルドのこと、そしてそのユグドラシルも昨日終わってしまったことなど…。

悟が話し終わるとイビルアイが難しい顔で腕を組んで考え込む。なんだか、かつてともに旅したふれいやーの言っていたりあるとは別の世界なのではないかと思ひ始めたのだ。

「私の世界にはモモン、じゃなくて、ええつと…」

「悟でいいよ、鈴木悟」

「そうか、サトルだな。覚えた。私もイビルアイと呼んでくれ」

「わかった。イビルアイね」

「うむ。それでだな私の世界にはサトルとそっくりな顔をした戦士が居たんだ。それが漆黒の英雄モモン」

「え、英雄？ それに戦士？」

「ああ。漆黒の鎧を身にまとい、二本のグレートソードを操る最強の冒険者だ」

そしてモモンの説明をイビルアイが始める。その強さや成した偉業、高潔な人柄や名声など…。イビルアイがその人物に強く憧れのような感情を抱いていることが悟にも伝わってきた。

「という感じだ。本当にサトルそっくりなんだ。私の世界のサトル本人なんじゃないかってくらいにな」

「ふーむ、なるほど…」

悟としてもエクストリームな偉業を連ねる魔導王よりはこっちのほうがまだ親近感が持てた。異常な智謀を持って国家を我が手のように操る魔導王よりは、という程度であるが。魔獣を従えたり吸血鬼と戦ったり魔王と戦ったりとか、どれも力があれば十分出来そうなおとだ。とはいえそれでもまだハードルが高いが。

人間種の戦士というのも、仮にユグドラシル2があつたとしたらわざわざユグドラシルの焼き直しをするのではなく、新しいビルドとプレイに挑戦するという意味で面白そうだし。

「そういえば話が逸れてしまったが、とにかく私は魔導国の冒険者で、魔神と戦った際に魔神の魔法でこの世界に飛ばされてしまったようなんだ」

「なるほど…」

長い話で少々飽きてきたのか、結局自分については割と簡単にまとめてしまうイビルアイ。

「それで元の世界に戻る宛とかは…」

「私が見える魔法の中には世界を移動するものはないし、そんな魔法があるという話も知らない。私は帰る手段を持っていない…」

「えっ、魔法が見えるの!?!」

「えっ？」

イビルアイが帰る方法よりそっちに食い付く悟。話が進まない。

「どんなのが使えるんだ!? ちょっと見せて!」

悟の常識ではゲームの中にしか存在しなかった魔法とかはつきり言っただけ興味津々である。

「あ、ああ…じゃあ、《クリスタル・ダガー／水晶の短剣》」

見た目に分かりやすく周囲に大きな影響を及ぼさない魔法を使用してみせる。

悟が驚き目を見開く様子を見ながらもイビルアイは違和感を覚えていた。普段より魔力の消費が重かったような気がしたのだ。

「私は土系の中でも特に水晶に特化したエレメンタリストだ」

「なるほど、やはり特化するというのは強みだしな」

魔法語りモードに入った悟の目に怪しい光が灯るのをイビルアイが見たのはきつと錯覚ではない。

そのまま悟は特化型魔法詠唱者の、それも死霊術系の有用性について熱く語りだす。

最近魔法について話し合ったりする仲間もいなかったのもまたえらく熱が籠っていた。

最初はイビルアイ的にもなかなか興味深く聞いていたのだがどんどん深みに進むに連れイビルアイでもついていけなくなりだんだん聞き流すようになっていった。第9位階以降の死霊魔法によるコンボとか特殊過ぎて参考にならない。

しばらく時間が経過し、ようやく悟がイビルアイがうつろな目で話を一切聞き流していることに気付いたのは悟の就寝時間までもう間もないような時刻であった。

「ご、ごめん！ ちょっと話し込みすぎちゃったみたいで…!」

「あ、ああ…。いや、大変参考になったよ…」

参考に来るとは言っていない。

「えーっと、そう！ 帰れなくて行く宛がないって話だったね！ 大丈夫、家に住めばいい。狭いけど」

「あー。いいのか？」

「もちろん。それに何だ…『誰かが困っていたら助けるのは当たり前』だからな」

その誰かの言葉をなぞるような言い方に何かを感じたが、それでもイビルアイはその言葉に感謝した。

そこに自分が惚れたモモンの放っていた輝きを見たような気がして。

「それが当たり前か…。すごいんだなサトルは。でも、ありがとう。助けてくれて…」

そう言つて笑顔を見せるイビルアイに照れたように目をそらす悟。

「じゃあとりあえず寝るところを用意しないと…」

「それなら大丈夫だ。これがある」

悟にそう告げるとイビルアイはテーブルを背負袋にしまい込むと、代わりに大きな木の板のようなものを取り出す。

それをリビングに置き、箱状の形に組み立てると1辺1mほどの大きな木箱が出来た。

「ここから入れる。サトルも入ってみるか？」

側面についた小さな扉を開け軽く屈むように中に入り込むイビルアイ。その身体に合わせて扉がうねるように変形するのを悟は見てしまった。

「ほら、こつちだ」

中から顔を出したイビルアイに手を引かれ悟も箱の中に入る。

いくら大きな箱と言えども子供と大人の二人が入ればギュウギュウ詰めになってしまうはずが…。

「なにこれすごい…」

中に入ったサトルは目を見張った。

箱の中は六畳ほどの広さを持つ部屋になっていたのだ。

床も壁も天井も木の板で出来ているログハウスのような綺麗な部屋だ。

家具は全く設置されていないが、天井には輝く電灯のようなものが付いていて室内を明るく照らしている。

「これはダン・ボル・バコといって冒険者が遭難したときに使う非常

シエルターだ。ここに毛布でも持ち込めばサトルの邪魔にならないだろう？」

「段ボール箱…？」

自慢げなイビルアイに悟が向き直り、ふと気づく。

「…ところで今更だけど、日本は土足で部屋に上がったらいけないんだ」

「えっ！」

イビルアイが悟の足元を確認すればたしかに悟は裸足だ。今まで気づかないとは…。

「す、すまない！　すぐに脱ぐから」

慌てて靴を脱ぎだすイビルアイに悟は優しく声をかける。

「謝らなくていいよ。そういう風習は言われなきやわからないし。ところで引き換えというわけじゃないんだが頼みがあるんだ」

「ああ、ありがとう。私にできることならなんでも頼んでくれ」

「よし、なら寝る場所なんだけど…」



「光よ消えろ」

悟はイビルアイに聞いたとおりに天井に取り付けられた《コンテナ ニュアル・ライト／永続光》の魔道具に向かって消灯のキーワードを呟く。

徐々に暗くなっていく光のなか、床に敷かれた毛布に包まれる。

「ああ、なんだか激動の一日だったな…」

枕元に置いた寝室から持ち込んだアラーム付きの時計のタイマーを確認し、ちゃんと設定されていることを確かめると、ちょうど明かりが完全に消えダン・ボル・バコの中は暗闇に包まれた。

色々なことがあった。美味しい料理に異世界の話、突然の同居人。そして…。

「これがあんな小さい箱の中なんて信じられないな…」

思わずニヤけてしまう。イビルアイには自分のベッドを使うよう

に言っつて、自分がこの箱の中の寢床を確保したのだ。

ちなみにリビングに置くのは邪魔だからと寢室の片隅に設置されている。

「ここにいろんなもの持ち込みたいなー。俺だけの秘密の部屋みたい…」

ニヤニヤと今後のリフォーム計画を建てながら悟は心地よい眠りに誘われていった。

第5話 アイちゃん買い物に行く準備をする

「本日はありがとうございます！」

「うん、鈴木くんもありがとうございます。じゃあ気をつけて。またよろしく！」

「はい、こちらこそよろしくお願いします！ それでは失礼します！」

悟は得意先担当者に頭を下げその場を辞すると、ゴーグルとマスクを被りビルの外へと歩き出た。

時刻は午後3時少し過ぎ、どんよりとした化学汚染黒雲に覆われた空はまだ薄明るい。

今日の予定はここまで。このまま直帰できると思うと足取りも僅かに軽くなる。

今までならこのまま真っ直ぐ帰って即ユグドラシルというところなのだが今日の悟は少々違った。

バスに揺られるばる郊外の大型のショッピングモールへと足を運んだのだ。

「ここに来るのは久しぶりだな…」

ショッピングモール内は空気清浄機が働いているため、ゴーグルとマスクを外して鞆にしまい、案内MAPをチェックして少女用のブランド服の店を目指す。

今日の彼はイビルアイを外に連れ出すために彼女の服を買いに来たのだ。

何しろ服がなければ服を買いに行くことも出来ない。イビルアイが服を持っていないというわけではないのだが、それは漫画の中の世界の世界のようなデザインであり、外に連れ出すための服としては少々問題があったからだ。

ハロウインのイベントのときなら問題ないかもしれないが。

そんな感じで女の子向けの可愛らしいお店に到着した悟だったが、入り口の段階でそのキラキラしいオーラに圧倒されかける。

(うおっまぶしっ！)

あの中に突入すると考えると少々脂汗が額に浮かぶ。

（いやまで！ 俺くらいの年齢なら娘がいてもおかしくない！ 堂々としていれば問題はないはず！）

さり気なく自分にダメージを与えるような思考をしつつ、意を決し店舗スペースに足を踏み入れる。

キヨロキヨロとあたりを見回し、目的のブツの置いてあるスペースを探しているとスススツつとさりげなく女性店員が近づいてきて声をかけられる。

「いらっしやいませ、何をお探しですか？」

一瞬ギクリとするがすぐに気を取り直し事前にシミュレートしていたように答える。

「ええ、知人の娘にコートをプレゼントしようと思ひまして。どんなものがいいのか…」

さり気なく悟の服装をチェックする女性店員。

（年齢は25歳から35歳くらい。職業は会社員？ ちよつと使い込んでるけどスカした高級ブランドのジャケット。結構裕福と見た。家族ではなく知人の子供へのプレゼントなら更にワンランク上のものを薦めても良さそうね）

そう結論付けた女性店員は悟に送る相手の年齢や体格について問いかける。ちなみに距離と視野の関係でボロボロな悟の靴は見逃してしまった。

「その方のお歳や体格はどのくらいでしょうか？」

「ええと、歳は今度12歳で身長はこれくらいだったかな」

これもまた事前に決めていたように答え、手でイビルアイの身長を示す。

「ああ、それからその子は金髪なんですよ。海外からこつちに来てて」
本当は海の外どころか世界の外だがそんなことは些細の問題である。

女性店員はかすかに考え込む。

（金髪外国人の女の子…。しかもナチュラルの！ 面白そう！）

内心でテンションがあがる店員。

一瞬何やら不穏な空気を感じた気がして微かに身を引く悟。

しかし女性店員がニツコリと営業スマイルを浮かべて案内し始めたのでついていく。

「こちらはいかががでしょうか？　こちらは近年流行のデザインになっております…」

そう言つて女性店員がサトルに見せたのはパステルブルーのコートだ。

大人と子供の境目にあるような可愛らしさと落ち着きを兼ね備えた奥ゆかしいデザインをしている。

「うーん、こんなに明るい色だと汚れとか目立ちませんか？」

「この製品はこちらにありますように最新の撥水加工が施されてまして、水や汚れを弾き、メンテナンスが容易になっております」

女性店員が示したタグには『水、汚れをはじく』『科学の力だ』『3年耐久』などと景気の良い文字が踊っている。

「なるほど…」

ひとまずこれを着たイビルアイの姿を想像してみる。

悟の脳内でこのコートを着てくると回つてニツコリ笑うイビルアイ。可愛い。

鳥頭がそれを見てサムズアップする幻影が一瞬脳裏をよぎったがチョップで振り払う。

「これにします」

値段を見ずに即決してしまう悟。ああ、いったいどうなってしまうのか！

「あ、あとこれと合わせて帽子も見せてもらえますか？　髪を保護できるときのものを」

「それではこちらなどうかでしょうか？　こちらはコートと同じシリーズの商品でデザインも親和性が高くトータルコーディネートに…」

悟の思惑は別のところにもあるのだが、女性が外に出るときは汚染大気から髪を保護する帽子を被るのは常識である。

特に違和感も抱かず女性店員は同じシリーズの同色のベレー帽を勧める。髪の保護を主目的にする帽子はゆつたりとしたベレーやハ

ンチング、キャスケット状のものが主流だ。

「ふむ…」

コートにプラスしてこれを被ったイビルアイの姿を想像してみる。悟の脳内でこの帽子を被ってくるりと回ってニツコリ笑うイビルアイ。確信的に可愛い。

鳥頭がそれを見て拍手喝采しながら指笛をかき鳴らす幻影が一瞬脳裏をよぎったがキツクで振り払う。

「これも買います」

「ありがとうございます！ 他にも一緒にプレゼントするものはありますか？」

その言葉に少し考え込むが、頭を振って断る。

「いえ、これだけで十分です」

「かしこまりました。ではレジにお持ちしますね」

服がレジに通され表示ディスプレイに表示される値段に一瞬目を剥く悟。思ったより高い。

（うわ、俺のこの服より高いじゃん…。これもかなり奮発して買ったやつなのに…）

とは言え今更買いませんと言う気もない。せっかく選んだのだ。

「支払はカードでお願いします」

ユグドラシルへの課金のために作ったクレジットカードを提示し決算する。

プレゼント用のラッピングを断り、コートと帽子を収めた汚染大気に触れないよう密封出来る紙袋に入れてもらう。

「ありがとうございます」

女性店員の明るい声を背にうけながら店舗を離れる。かすかな達成感と安堵のため息を吐きながら。



悟は靴む扉を開けて今日も帰宅する。

靴を脱いでいると悟の帰宅を察知したイビルアイが顔を出す。

「おかえり」

「あ、うん。ただいま…」

イビルアイと同居して数日になるが、このただいまという挨拶にはなんとなくまだ気恥ずかしいというか、慣れない。

まあ、行つてきますという挨拶にもまだ慣れていないのだが。

そんな感情を噛み締めながら二人並んでリビングに向かいながら会話を交わす。

「今日は少し早かったな？　ところでその袋は？」

「直帰だったからちよつと寄り道をね…。これはお土産」

「土産？」

可愛らしく首を傾げるイビルアイに袋を渡す。

「開けてもいいのか？」

「どうぞ」

受け取った紙袋をしばらく裏返したりひっくり返したりするイビルアイ。

何をしているんだ？　と悟が尋ねる前に。

「…どうやって開けるんだ？」

どうやら異世界には密封式紙袋というのがないようだ。

「その赤い紐を引っ張ると口が破れるよ」

袋を開けて中を覗き込むイビルアイ。折りたたまれた布を見てもピンとこなかったのか到着したりリビングのテーブルに袋を置き、中身を取り出して広げる。

「これは…コート？」

「うん、今後外出するときにも着たらいいかなと思つて。イビルアイが今持っている服はちよつとき、こつちだと浮いちゃうから…」

その説明に得心いったというように頷くイビルアイ。

「なるほど…てれびでみたところ私の世界と服飾文化はだいぶ違うようだしな。うーん、しかしこの色は私には少し派手じゃないか？」

ちよつと恥ずかしそうに苦笑するイビルアイ。こんな派手な色の服はどこかの王族や貴族の娘が着るようなものだというイメージがある。

「いや、似合うと思うよ？　ちよつと着てみてよ。帽子も」

「ああ、うん…」

おずおずと袖を通し帽子をかぶるイビルアイ。悟が想像したとおり、可愛い。

「どうだろうか？」

「うん、似合う似合う。可愛いよすごく」

「うっ…そ、そうか…。それならいいんだが…」

悟が褒めるとなんともしも恥ずかしそうにモジモジするイビルアイ。とても可愛い。

「そ、それよりサトル！　早く風呂に入ったらどうだ！　食事もあるしなー！」

照れ隠しのように大きな声を出すイビルアイ。顔が赤い。

「…うん、じゃあ風呂に行ってくるよ」

まだ先日言われた「不潔！」が心にささくれのように残っている悟は素直に風呂に向かった。

そしてスチームバスでさっさと身体を清め、リビングへ戻ると…。

「ふふふっ…。可愛いか…。うふふふ…」

などとニヤニヤしながらコートと帽子を身に着け自分の体を見下ろしながらポーズをとるイビルアイを見つける。何この可愛い生き物。

「何この可愛い生き物…」

思わず口に出してしまったつぶやきを聞きつけイビルアイがバツと悟の方を振り返る。

「うあっ！」

みるみる顔を赤くするイビルアイ。

「あー、うん。すごく可愛いよイビルアイ。似合ってる」

ここまで喜ばれていると贈った側としては冥利に尽きる。頬も緩むというものだがイビルアイはその笑みを生暖かいものと理解したようだ。

「うあああ！　そんな顔で見るなー！」

悟の顔に帽子を投げつけ、うづくまる。

恥ずかしすぎて顔が熱い。

「いやいや、本当に似合ってるって。そんなに喜んでくれて俺も嬉しいんだよ」

「うー…」

うずくまったままいやいやと頭を振るイビルアイ。

結局イビルアイをなだめ、立ち直らせるには少々時間を要した。



なんとかイビルアイを復活させて夕食を摂ったあと、悟は明日は休みだからと二人で生活するための生活用品を買いに行くことを提案する。

「なるほど、あのコートはそれで買ってきたのか」

「そういうこと。あとガスマスクとゴーグルも買ってきたから外出るときは使ってたね」

「毒は無効だから本当はなくても良いんだがな…」

とはいえつけずに外に出たら吸血鬼とバレてしまうのだからつけないという選択肢はない。

イビルアイが元の世界で使っていた仮面はあからさまに怪しすぎるので論外である。

しかし問題点は外見だけではない。

「ところで、外でイビルアイって呼ぶのはちよっとおかしいと思うから、もうちよっと他の呼び方に出来ないかな?」

子供の名前や呼び名にイビルアイというのは流石にキラキラネームでも少々突飛だ。

「うん? ああ、まあ確かにあまり普通に名前として付けるもんじやないか」

「イビルアイはどんな呼び方が良いと思う?」

「そういわれても、私はこの国での一般的な名前を知らないからなあ。サトルが考えれば良いんじゃないか?」

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーがいたら「絶対にやめ

ろ！」と忠告するようなことを平気で言うイビルアイ。

無知とは恐ろしい。

「うーん、イビルアイだから……。『アイ』とかかな？　アイちゃんとか。
よくある感じの呼び方だし」

ギルドメンバーたちが聞けばモモンガさんが考えたにしては思ったより遥かにまともだと胸を撫で下ろすだろうネーミングであるが、それを聞いてイビルアイは顔を真っ赤にして慌てる。

「愛する人
アイちゃん!?　なんでそうなる!?!」

「え？　ただイビルアイの後半から……」

「それならエレとか……。ああ、そうか……。翻訳されているのか私の名前は」

「翻訳?」

「ああ、私もなぜそうなっているのかは知らないんだが、私たちの世界で話し言葉が通じないということはないんだ。以前一緒に旅をしたぶれいやーが言うには音ではなく意思で会話をしているんじゃないかとか推測していたが、私もあまり詳しく考えたことがなくてな」

話しながらイビルアイが無限の背負袋から筆記用具と紙の切れ端を取り出す。

——ちなみに二人はこの数日の間にお互いのことをある程度深く話し込んで世界移動やユグドラシルとリアルと異世界とプレイヤーなどについて考察したりしている。

結論は結局『情報が足りなすぎてよくわからない』に落ち着いたのだが。

「たとえば、ラージア・エレイビルアイをりあるの文字で書くところなる」

ラージア・エレとあまり上手くない文字で紙に書き取る。

「イビルアイは日本語出来るのか……」

「少しだけな。ひらがなとカタカナと数字くらいだ。これで『ラージア・エレ』だ」

言葉に意味を込めず、発音だけに意識して声を出す。

悟は少し驚いた様子でポツリと口を開く。

「さっきまでイビルアイって聞こえていたのに……」

「私にはそれも『ラージア・エレ』と聞こえるんだがな。意味は邪悪な眼とかそんな意味だ。サトルはどんなふうに聞こえているんだ?」

「俺にはこう聞こえる『イビルアイ』つと…」

悟もペンを取りラージア・エレの下にイビルアイと書き足す。

「ふむ、『いびるあい』か…。イビル・アイ、イビルアイラージア・エレ…なるほどな」
「意味もイビルアイが言っていたような邪眼とか魔眼とかそんな意味だよ」

「そうか…。ところでそれがなんで『愛する人』になるんだ?」

「えっ!? そんなふうに聞こえたの!?!」

予想もしていない内容に驚く悟。流石にこのタイミングでいきなり愛を囁いたりするはずがない。

「ああ、何事かと思っただぞ…」

「あく、うん。そうか…。ええと、この『イビルアイ』の『アイ』は外国の言葉で『眼』って意味なんだけど、日本語だと同じ発音で『LOVE』…『愛』って意味なんだよ。それで、この『愛』ってのは日本だとそのままの表記で女の子の名前としても使われるから」

「そういうことか…。難しいなニホン語」

「どうする? 別の呼び方にする?」

イビルアイは少し考え込むが、確認するように問い返す。

「…それは普通の名前なんだな?」

「うん、普通。百人の内1人か2人くらいは居ると思うくらいには普通」

具体的に統計を知っているわけじゃないが、悟が小学生の頃、2回ほど愛という名前の女の子と同じクラスになったことがあるような記憶があった。偶にちら見する芸能ニュースにも愛という名前の芸能人が出ていた記憶もある。

そしてその名前をおかしいと感じたことはない。

「じゃあそれでいい。普通の呼び方を考えるのが目的だったんだ。私のほうが慣れるさ」

「それじゃあこれからはアイ愛って呼ぶでいい?」

「う、うむ…。良いぞ…」

なんかちよつとゾワゾワするイビルアイ。非常にむず痒い。

「ん〜…。大丈夫？ アイ？」

ゾワゾワ。

「だ、大丈夫だ。きつとすぐ慣れる」

「それなら良いんだけど…」

それでもなんとなく口元がムニムニ動いてしまいうイビルアイ。気を取り直すように頭を振って話題を変える。

「と、とにかく、これで呼び名は問題ないな。服装も問題なし。他に何か問題になるようなことはあるか？」

そう言われ悟は少し考え込むが、とりあえずは思い浮かばない。

「いや、大丈夫だと思う。何か気づいたらその都度教えるつもりだし。ひらがなとかタカナが読めるならなおさら」

「そうか、じゃあ明日は出かけるんだな？」

「うん。そうしよう。なんか欲しいものとか考えておいてよ」

それを聞いてイビルアイの顔に不敵そうな笑みが浮かぶ。あるいは意地悪な笑みか。

「分かった。どこに連れて行ってくれるか楽しみにしておこう。私の世界ではデートのエスコートは男性の役目だしな？」

「で、デート!？」

思わぬ単語に素っ頓狂な声を上げてしまう悟。

「男女が揃って出かけるんだ。違うのか？」

楽しそうに問いかけてくるイビルアイに悟はキョドリつつ考える。

「いや、うん？ そう、なのかな？」

「じゃあそれで決まりだ。私は食器を片付けてくるよ」

そのままの顔で楽しげに立ち去るイビルアイ。足取りは軽い。

悟がその様子を見送りながら「デートか…」なんて呟くと脳裏にペロンチーノの幻影が現れ中指を立てて裏切り者―!と叫んで消えていった。

「別に裏切ってねーし…」

第?話 アイちゃんとハロウィン

悟は暗闇の中で目を覚ますと僅かに身じろぎをする。

なぜ自然に目が覚めたのかは分からないが、まだ起こされていない以上起床時間までは時間があるはずだ。睡眠不要のイビルアイがスケジュール管理してくれるおかげで二度寝でうっかり寝過ごしかけるようなアクシデントはもう起こらない。

布団の中を探りすぐ近くに寄り添っていたものを腕に収めると、ギョツと抱きしめ寝直しモードに入る。

それには本来は体温がないのだが、一晚中くっついて寝ていたため悟の体温が移っておりほのかに温かい。

「んん? 起きたのか?」

悟の動きに反応してイビルアイが声をかける。

彼女は睡眠を必要としないが、布団の中で横になって目を閉じてじつとしていたりするのは嫌いではない。人間として生きていた頃の残滓は数百年たつてもなかなか風化していなかった。

あるいは、自分を人として扱ってくれる人々に恵まれたおかげか…。

「んん… もうちょっと…」

脳と身体の睡眠欲求に従い抱きしめる腕に更に力を込めながら身体を擦り寄せる悟。

そのまますぐに寝息を立て始める悟にイビルアイは穏やかな笑みを浮かべる。昨夜は彼の身体が大きく力強く思えたが、こうして甘えるように丸まって眠る様子を見るとまるで子供のようだ。

——無理もないかもしれない。彼も私が家族と命を失ったのと同じような年頃に両親を失ったのだという。何かに甘えたいという欲求が残っていてもおかしくはない。…自分のように。

「ふふふ…」

顔を見下ろしながらそつと髪に触れると、彼はくすぐったそうにまた微かに身じろぎをした。



「サトル、サトル。そろそろ起きないか…?」

優しく己を揺り動かす感覚に再び覚醒する悟。

手が無意識に温もりを求めて動くが、空振りに終わる。

「ん、んんん…?」

ゆっくり目を開けると既に部屋着の上にエプロンという普段着を身に着けたイビルアイが枕元にかがみ込んで悟を見下ろしていた。

黒、とかどうでもいいことを考えながら身を起こしながらあくび混じりに口を開く。

「あゝ。今日は休みだなー…。」

そうでなければ昨夜ももっと早くに休んでいただろうし、朝もこんな時間まで眠っていられなかった。

「ああ、でもそろそろ起きろ。朝食の用意もできているぞ」

「うん、すぐ行く」

イビルアイがダン・ボル・バコから出ていくのを見送りながら布団から抜け出し、枕元に用意されている服を身につける。

ダン・ボル・バコの中は気温を一定に保つ魔法もかけられており、よほど極端な環境に設置されない限りたとえ真冬でも布団から出るのが辛くなるような寒さにはならないのありがたい。

「さて…」

服を着終えた悟もダン・ボル・バコから出て、寒い寝室とリビングを抜けてキッチンへ向かう。

「おはようサトル」

「おはようアイ」

挨拶を交わしながらテーブルの席に着く。

テーブルの上にはスイ・ハ・ンジャーで焼いたパン、塩漬けにした肉片が混じったスクランブルエッグ、地球には存在しないらしい小さな赤くて丸い果物が3つ、そして湯気を立てる紅茶。ごきげんな朝食だ。

「いただきます」

「どうぞめしあがれ」

悟が食事をする様子をニコニコと見つめてくるイビルアイ。少し気恥ずかしくなった悟はなんとなく口を開く。

「今日はどうしよう？ アイは何かしたいことある？」

「今日はお出かけたいな。色々面白そうなイベントも有るようだし」

「イベント？」

「ああ、今日はハロウィンという日なんだろう？ 仮装しているとお菓子を貰えるという」

そういえばユグドラシルでもそんなイベントがあった。

ユグドラシルでは人間種限定の街に異形種プレイヤーだけが拾得できるイベントアイテムが設置され人間種と異形種で奪い合い、人間種プレイヤーが守りきった数によって人間種にボーナスアイテムが支給され、異形種プレイヤーが強奪に成功した数によって異形種にボーナスアイテムが支給されるというような戦争イベントだったが。「そうだけど、そういうのはやってる場所が限られるんじゃないかな？」

少なくとも個人宅でハロウィンだからとお菓子を無差別に子供に配るような風習は日本には根付いていない。

「大丈夫だ、ちゃんとイベントを開催している場所をてれびで調べておいた」

イビルアイが近くでハロウィンイベントを催している場所についてメモ書きされた紙を取り出す。

「用意周到だな・・・」

「まあな」

折角の休日と一緒に出かけ出来るんだからたくさん楽しめるように下調べをするのは当たり前だ！ とイビルアイは内心思ったが声には出さなかった。ちよつと恥ずかしいし。

「じゃあその辺に行くとして、仮装する衣装は準備してあるの？」

「私が以前着ていた服でいいだろうか？ ニホンだと馴染みないデザインだしな」

「確かに。具体的に何の仮装なのかと聞かれたらわからないけど。少

なくとも普通の服じゃないし」

「……向こうじゃ普通の服なんだが……」

ダウト。向こうでもおかしな格好である。

「ああ、そうだ。せっかくだから俺も仮装していいのかな。大したものがあるわけじゃないけど」

ちょうど食事も終わった悟が席を立つ。じゃあ私は食器の片付けをしておくというイビルアイに「ごちそうさまを告げ寝室へ向かい収納を漁る。」

記憶に違わない場所にしまい込まれていたソレを取り出す。

「懐かしいな……。たしか3回目のオフ会るときに持っていったんだっけ？」

近頃はアインズ・ウール・ゴウン時代の記憶を思い出ししても胸がうずくことが少なくなったと思う。

時間が経ったせいなのか、新しい絆を手に入れたせいなのか……

またジクジクと胸がうずくのを感じ自嘲気味に頭を振り、着替え始める。痛みを忘れたのか、それとも痛みを失いたくないのか、自分でもわからない。

「サトルー。私の方は準備が……うわっ!? スケルトン!?!」

「違うぞイビルアイ。私は——オーバ^死ーロー^超ードだ」

ゴム製のガイコツマスクとホネホネTシャツとホネホネ手袋を身に着け、フード付きのコートを羽織っただけの粗末なんちゃって超越者だが。

それでも重々しい口調に大仰な動作でロールプレイをしてみるとユグドラシルに戻ったような気分がして妙にしつくりとした気分だった。

「ああ……。なんだか……様になっているな?」

(なんかこう、本当に仕草の一部とかアインズ・ウール・ゴウン魔導王に似てるんだよね……。声はモモン様にそっくりだけど……)

「じゃあ、そろそろ行こうか?」

悟が声をかけると二人は外出のために仮面やガイコツマスクを外しガスマスクとゴーグルに変える。

「それじゃあ行こうか」

「うむ、まずはこのショッピングモールのイベントだ」

「はいはい」

二人は手を繋ぐと笑い合いながら玄関の扉を開け最初の目的地に向かつて歩き出した。



「次で最後だったけ？」

効率の良い巡り方をしたとは言え10軒近くの施設を巡った悟はややゲンナリした声を上げた。

「ああ、いろいろあって楽しかったな！」

一方イビルアイは元気いっぱいである。アンデッドは疲労しない。最後にやってきたのはアークロジのすぐ近くに存在するこの地方では最大級の規模を誇る巨大複合施設だ。

あまりにもでかすぎて全部のテナントを回ると1日掛かると言われているほどである。

正直悟もイビルアイもめったに利用していない。

「イベント会場は向こうだな！」

「ああ、行こうか」

周りにはチラホラと既に仮装している人が居るのを見て二人も仮面とマスクを付け手を繋いで歩き出す。はぐれてもメッセージを使えばすぐ連絡が取れるのだが、そもそもはぐれないに越したことはない。

そんな感じでタラタラと歩いているとやがて怪物がうじゃうじゃとひしめくイベントホールに到着した。

「うわあ」

辺りはかなり本格的なコスチュームから、紙製のお面をつけただけの人たちまで多種多様な異形種で溢れていた。

色々居るなあ、などとキョロキョロしているとイビルアイに手を引かれる。

「受付はあっちだって」

「うん…」

ぼんやりあたりを眺めながら列に並ぶ悟。

そして自分たちの順番まであと数人というところで正気に返った。

「え？ 参加受付？ 何に参加するのこれ？」

「なについて、仮装コンテストだけど？」

「聞いてないよー！」

今までは精々仮装をして店を訪れるとお菓子とか割引券とか商品券が貰えるといったものだった。

何かイベントにアクティブに参加するとか聞いていない。

「いいから。賞品が豪華なんだ」

イビルアイが指差すポスターを見れば多種多様な賞品が掲示されている。

食料品、衣料品、ペット用品、家具、家電などなど。特別大賞にはなんとリゾートホテルへの宿泊券が。

「まあ確かに豪華だなあ…」

やる気はあまり上がらなかったが、それでも出たくないという気持ちには小さくなった。

そして受付の順番が回ってくる。

「えーと、個人部門、カップル部門、ファミリー部門、団体部門があるのか…」

「カップルカップル」

イビルアイが悟の脇腹をつつきながら何やら言っているのを無視してファミリー部門にノミネートする。

「……」

脇腹をつつきイビルアイの力が強くなったが気にしない。

受付を終え、F-33番の番号札を貰いその場を離れる。

コンテスト開始まではまだ大分時間があった。

「さて、まだ時間があるけどどうしようか…？」

イビルアイは手を繋ぐのを止めて悟のコートを掴んでいる。多分何らかの抗議のつもりなのだろう。

「……」

黙ったままスツとイビルアイが一点を指差す。そこにはキラキラした可愛らしい雰囲気の女の子向けの店舗が。

「わかった。あんまり高いものじゃなければいいよ」

「そこは弁えているとも」
悟の財布

「……それはありがとう……」

自分で振ったとはいえさり気なく甲斐性なしと言われ少し凹んだ悟を連れて実は全然不機嫌でもなかったイビルアイは足取り軽くお店へと向かい、二人で楽しくショッピングを満喫した。



仮装していると5%引きして貰えるというキャンペーンもあり、可愛いアクセサリーを買って貰いご満悦のイビルアイと、さらに色々な店を連れ回されまたお疲れ気味になった悟はようやく開始時間になった仮装コンテスト会場に戻ってきた。

ファミリー部門ということで周りにはイビルアイよりさらに幼い子供を連れた参加者たちが沢山いる。

実際のところ、こういう審査では幼さというものが大きなアドバンテージになるのをイビルアイはわかっていた。

だからそれをより武器にしやすいカップル部門に出ようという企みもあったのだが、悟が嫌がる理由もわかるので諦める。

12歳ほどというイビルアイの容姿は0歳からの参加者が揃っているこのファミリー部門では大したアドバンテージにはならない。

(と、思うだろうが……。私には秘策があるんだ！)

ニイ、と仮面の下で笑うイビルアイに、それなりに長く濃い時間を共に過ごした悟が何か感じ取って少し狼狽えたところでついに二人の順番が回ってきた。

「次は33番、鈴木さんファミリーです！」

その声を受けテテテテ、と擬音がしそうな感じで可愛らしく駆け出すイビルアイ。悟もその不意打ちのスピードに慌てて小走りです

いていく。

イビルアイはステージの中央、マイクの前に立つと仮面をすつとずらして素顔を晒すとペコリと頭を下げた。

「みなさん！ トリックオアトリート！ ハジメマシテ！ スズキ・アイです！」

はつらつと元気よく、そしてどこか片言な日本語で喋りだすイビルアイ。

これがイビルアイの秘策である。外国人風の容姿とたどたどしい喋り方で審査員の萌えポイントを突こうというのだ。

「今日ノアイはヴァンパイアです！ サトルはスケルトンです！ イタズラしチャイマスヨ！ だから、お菓子チョーダイ！」

ちなみに、実際イビルアイはまだ翻訳を使わず普通に日本語を話すとこんな感じであり、演技しているわけではない。

テンション以外は。

今までのファミリー参加者の子どもたちが大体親に『やらされている』という感じのローテンションでの挨拶だったのに対し、媚を理解したうえ、心底楽しんで参加しているアトモスフィアを醸し出すイビルアイの挨拶には観客たちも好意的な反応だった。

ついでにいえば、保護者であろうガイコツ男が後ろで逆に戸惑うようにオロオロしているギャップもまた面白さを演出していた。

「それデは、ヨロシクおネがいシマース！」

楽しそうに色々可愛げのあることを喋ったイビルアイは最後にそう言ってブンブン手を振り舞台袖に下がる。そしてそれに慌てて付いていく悟。

舞台袖に引つ込む寸前、彼が照れたようにペコペコ頭を下げる様子に会場は温かい笑いに包まれた。

「何にもしてないのに疲れた…」

「だらしないな」

出番を終えホール周辺の喫食スペースで一息つく二人。

店員が注文を取りに来たので悟はコーヒーを、イビルアイは「コレ

！』と元気よくメニューを指してクリームパフェを注文した。

「いやー、しかしあんな話し方で話すとは思わなかったよ」

「まあ、そもそも魔法を使っていないマイクで拡声したら翻訳されないからな。ニホン語でしゃべらないと」

「あ、そうか…」

しばらくして二人のテーブルに注文のパフェとコーヒーが運ばれてくる。

「いただきます」と言って食べ始めるイビルアイ。

一口口に含まれば「んんんっ」などと声を上げながら幸せそうに顔を綻ばせる。

「それ美味しい？ 少し俺も食べていい？」

ちよつと気になる悟。

「ああ、いいぞ。ほら、あーん」

スプーンでホイップクリームとアイスクリーム、そして載せられていたバイオバナナの輪切りをすくい取り悟の口元へ。

「あー…ん。…うん甘い…。…美味しいな」

「もつと食べるか？」

対面に座っていたイビルアイが椅子を動かし悟と隣り合うように座り直す。

「いいの？ じゃあもうちよつとだけ…」

そんな感じに仲良くパフェを分け合い、更にしばらくダラダラとおしゃべりを続け時間を潰す。

そしてしばらく時は流れ、コンテストの結果発表のときがやってきた。

しかしして結果は…。

「……………。続いてファミリー部門第3位は、33番鈴木さんファミリーです！」

「お、やったなアイ！」

「ああ、3位か…。そんなもんかな？」

嬉しそうな悟と少し残念そうなイビルアイ。

しかし再びステージに上り、賞品の目録を渡されると喜びに破顔

し、マイクに向かつてまた「アリガトー！」なんて大きな声で言つて観客席に手を振る。

大きな拍手を受け悟はちよつと恥ずかしそうに頭を掻いた。



「ただいまー」

「ふう、ただいま…と」

玄関の扉を軽やかに開いて軽い足取りで家に上がるイビルアイと、一日中遊び歩いて少々疲れ気味の足取りで家に上がる悟。

楽しかったが、疲れたものは疲れたのだ。

「ふー、やれやれ…」

軽く伸びをしながら肩を回す悟に荷物を（といっても全部インフイニティ・ハヴァザック無限の背負袋の中に入れてあるのだが）部屋に置いたイビルアイが声をかける。

「さて、まずはお風呂で身体を洗つてさっぱりしよう」

「そうだね。さつさと体を洗つてくつろげる格好になりたい」

かなりの時間汚染大気の中を歩き回り身体の汚れが気になつていた悟も同意し、さつさとスチームバスを浴び身体を清める二人。

さっぱりすると部屋着に着替えリビングのソファアに並んで腰掛け寛ぎ始める。

「今日は楽しかったな…」

「ああ、そうだな…」

外で夕食を食べてきたため満腹状態でもある悟はもうあくび混じりだ。

「疲れたか？」

「んー、ちよつとね。まあ、しばらくはゆつくりしよう」

イビルアイの肩に手を回す悟。イビルアイも抵抗すること無く悟に身を寄せ肩に頭を預ける。

「楽しかったな」

「うん、楽しかった」

二人はそうしてしばらくの間ゆったりとした時間を寄り添って過ごした。

食事にあっさり釣られた悟は並べておいて、と言われて渡された皿を手にリビンググへ向かう。

ちやぶ台の上に二人で料理を並べ差し向かいで座る。

「じゃあいただきます」

「ああ、どうぞ」

パンに果物、昨晩の残りのスープにお茶という朝食を平らげながらちらりとイビルアイを窺う。

彼女は悟が食べる様子を満足そうに見るだけで食事を取っていない。

なんというか、小さい子供が食べてないのに自分だけ食べているというのは妙に罪悪感を覚えて居心地が悪い。

「なあ、アイも食べないか？」

「ん？ 私は別に食べなくてもいいって言っただろう。アンデッドだし」

「でも食べられなくはないんだろ？ 一緒に食卓を囲んでいるのに一人だけで食べるのもなんか…。食べているのを見られていると気になるし…」

「そういうものか…。食事は皆でとったほうが美味しいとかそういうやつか？」

正直なところ悟は『食事は皆で食べたほうが美味しい』などと言う性格ではないが、それでも目の前でじっと見つめられながら食べるくらいなら一緒に食べるほうがマシと思う程度にはストレスである。

「…うん。多分そんな感じ」

「うーん、でも食材が…。理由は分からないが食べ物を生み出すマジックアイテムの使用可能回数が減っていてな…」

「減ってる？ 使用可能回数が？」

ユグドラシルではそんなことが起こったりはしなかったが、などと考えかけて悟は思わず自分に失笑する。

ゲームのようなアイテムではあるが、ゲームの話ではないということとをいつになれば自分は了解できるんだろうか。

「それはアイの世界では普通に起こることなの？」

「いや、私も聞いたことが無い。世界から飛ばされたときに何かあったのかもしれないが…」

うーん、と考え込むが答えは出ない。

「とりあえず、どれくらい使用回数が減ったの？ 半分くらい？」

「1日に3回使えるはずが2回しか使えない。他のものもいくつか試したがどれも使用回数や作れるものの量が2/3ほどになっていた」
「ふむ…」

「ああ、それに魔法を使うときの魔力の消費も増えているようなんだ。もしかしたらこの世界では魔法を使うためのコストが多くなってしまうのかもしれない」

「世界の違いか…。それじゃ検証とかも出来ないなあ…」

「ああ。だが、多少解決する方法もある。取扱説明書によるとエマーゼンシー・ランチボックス非常用弁当箱は加工してあるものほど量が少なくなってしまうという特性があるらしいから、パンを直接取り出したりするのではなく小麦粉の状態で取り出せばもっと多く出せる。まあ、そうするならもっと調理器具が欲しいところだが…。それでも二人分に足りるかは難しいから、あとはいりあるで食材を入手すれば…」

冒険者非常キット付属の説明書を取り出してイビルアイは仕様について読み上げる。

「む…。食材か…。この辺りではあまり良いものは買えないけど…」

この近所のスーパーマーケットで売っているのは悟がいつも買っていた有機物循環システムから作られた液状食料や固形食料、有機物合成システムで作られた合成フードパウダーを押し固めて成型する合成食材が主で、良いものでも精々クローン培養で作られたバイオ食料の2級品といったところだ。

「そうなのか…。確かにこの辺りは食料の生産ができそうな土地じゃないしな…」

このあたりだけでなく地球全土がそうなのだがこの世界の全容を未だ理解できていないイビルアイに知る由もない。

「まあそんな感じだし、とりあえず今日は1人で食べてくれ」

「ああ、わかった。でも明日帰りにでも食料品店に寄っていいこうか」

「……そうしたいならそれで良いが……」

イビルアイがやや呆れるように呟く。

そんなに1人で食べるのが嫌なのかと。

「とりあえず今日の予定なんだけどまずは一番にアイの服を買いに行こうと思うんだ。コート以外にも必要だからな」

「ああ、そうだな」

イビルアイの今の服装は元の世界ではマントの下に着ていたあちこちにスリットの開いたワンピースである。

冒険者として活動していた頃はハツタリもあつたが日常を過ごすには少々外観年齢にそぐわないセクシーさである。

「それと、ちよつとした確認だけインフイニティ・ハヴァザック無限の背負袋を持つていくことに問題はないよね？」

「ん？ それは問題ないが、どうしたんだ？」

「よし、じゃあ荷物を気にせずに買い物できるな。配送頼むと高いんだ……」

苦い顔をする悟。自家用車を持ってないような層には大きな買い物をする際、結構な悩みの種である。

「ああ、なるほど」

「ちよつと歩き回ることになるけどショッピングモールじゃなくアウトレット商品のお店に行こう。配送料を考えなくていいならそつちのほうがあくなるし」

「そこは任せる。私はこの周辺の店のことなんて知らないしな」

「うん、任せておいて」

悟も実際大して詳しくないのだが、昨日のうちにインターネットで検索しマップを数パターン脳内にダウンロードして備えているので抜かりはない。

「午前中は服を買ったあとは家具とか家電なんかの大家物を買って、午後からはいろんな店が集まっているショッピングモールを見に行つて小物なんかを揃えようか。食器とかは安くて良い物とかはともかくただの安物ならショッピングモールで買えるし……」

「わかった」

必要そうなものを指折り考えながら悟がプランを出す、まだこの世界のことを把握できていないイビルアイにはそれが正しいと信じしか出来ない。

「さて、朝食も済んだし。それじゃあ、食器を片付けて準備ができたら行こうか」

「ごちそうさまでした、と言いつつ食器を持って立ち上がる悟に続いてイビルアイも立ち上がりキッチンへと食器を運ぶ。

二人で手早く食器を片付け、外出のための身支度を整える。

「なんかこのがすますくつて視界が狭くて鬱陶しいな…」

「我慢してくれ。マスク無しで子供を連れ歩くなんて虐待にしか見えないんだから」

「わかつている…」

甲高い悲鳴のような軋みを上げる扉を開け部屋から外へ出る二人。イビルアイは転移初日以来の外出だ。

「じゃあ、行こうか」

すつと手を差し出す悟。

「あ、ああ」

おずおずと手を伸ばしその手を小さな手で掴むイビルアイ。

イビルアイの冷え切った指先から悟の体温がじんわりと伝わってくる。

(なんだかな…。こういう天然に人誑しなところもモモン様に似ているのか…)

そんなことを考えながら悟に手を引かれイビルアイは初めてののりアルの街へ歩み出した。



近所のバス停から乗ったアーマード・バスに揺られて十数分。

二人は最初の目的地の某地域密着型服飾店にやってきた。

「すごいな…。これ全部が売り物なのか？」

ずらりと並べられた大量の服にイビルアイが感嘆の声を上げる。

前の世界では古着屋で古着を買うのでもない限り服というのは自分たちで作るかオーダーして仕立てて貰う物だ。

長く生きてきたイビルアイでもこれほど大量の完成済みの、しかも新品の服など見たことがなかった。

「そうだよ。まあこのへんはアーコロジー内では売れない程度のものが流れてきてるだけでそんなに良いものじゃないんだけど」
「とてもそうは見えん」

近場の服を手に取り布地を触れば生地の凄まじい整いっぷりに思わず目を見張る。

「子供服は向こうの方みたいだよ」

「あ、ああ……」

悟に先導され少女向けの服を扱った一角へと向かう。

「……これ、全部買っても良いのか……?」

「いや、駄目だから! そんな金ないから!」

「……どれを選んでも良いんだよな?」

「……ああ、うん。それなら……」

大量の可愛い服に囲まれて自分でもとつくに枯れ果てたと思っていたイビルアイの女の子な感性がウズウズと刺激される。

そして悟は、女の子が持つおしゃれへの欲求を甘く見ていたことを痛感することとなる。

「これ、私に似合うかな? どう思うサトル?」

「えー、うん。可愛いんじゃないかな」

「あ、でもこっちのも良いな……。どうだサトル?」

「どっちでも……。あつ、いや、最初のやつの方が良いかな?」

「なるほど……。たしかに。こっちは少しシンプルすぎかな」

「こんな感じのやり取りがそろそろ2時間である。

「なあ、アイ。そろそろ次の店に行きたいんだけど……」

「んー。そうだな……。もう少し……」

「このやり取りもそろそろ8回目である。

「本当にさー……。他の買い物もあるから」

「仕方ないな……。じゃあこれとこれとこれでいいか……」

といって選んだのは悟の記憶が正しければ概ね1時間半は前にキープしておいたものである。

だがあえてツツコミはしない。悟だって女の子というものがどういう生き物かという程度の知識は多少は持っている。

イビルアイが選んだ服を持って黙ってレジに向かう。

「お会計は…」

「か、カードで…」

下着、外出着、部屋着などそれぞれ数セット購入した金額に思わず顔がゆがむ悟。

昨日のコートと合わせたら限度額の4分の1を超えている事に気づき背中に冷や汗が流れる。

「あ、そうだ。服を着て帰ってもいいですか？」

「はいどうぞ。試着室は使って下さい」

会計を終えた服が詰まった袋を持って試着室へ向かう。

「ふふふっ。どれを着るかなあ」

「なるべく早く決めてくれよ…」

「わかっている」

そんな感じのやり取りをして入っていったのが既に15分前。

イビルアイはまだ悩んでいた。

「うーん、やっぱりパンツよりスカートのほうがいいか…」

「なあアイ…」

カーテン越しの悟の呼び声にかなりの苛立ちがまじり始めているのに気づき流石に時間をかけすぎたかと反省する。

「分かった、もうすぐに出るよ」

そう言って少し焦ったのが悪かったのか、パンツと一緒にショーツまで下り下げてしまいうィビルアイ。

「おっと」

下がったショーツを上げようと少し体を捻ってショーツに手を伸ばすと腿まで下げていたパンツが足を引っ張ってバランスを崩し…。

「わ…わわっ!？」

慌てて足を広げ体勢を立て直そうとするが普段あまりパンツを履

かなかったこともありこの状況でのバランスのとり方をイビルアイは身体で理解できていなかった。

腿まで下ろされたパンツに足を取られヨロヨロと数歩よろめきそのままグラリと身体が倒れ…。

「うわあっー!」

「おわっ!? アイっ!?」

ごろろんと転んだ先は試着室のカーテンの隙間。そこから外に飛び出してしまふ。

イビルアイの悲鳴に気づいた悟がとっさに手を伸ばし抱きとめたおかげで床に頭をぶつけるようなことはなかったが。

「大丈夫? アイ? …あ」

「ああ、だいじょうぶ…ぶ…」

悟の視線はイビルアイがバランスを崩した原因を探してつつつと下がっていき、パンツもショーツも下ろされてしまつて無防備になっている部分にたどり着く。そしてそれに遅れること数秒。イビルアイも自分の状態と悟の視線の先に気づき…。

「うわああ!! あぶっ!?」

「ぶっっ!」

顔を真っ赤にして慌てて立ち上がり試着室に逃げ込もうとするイビルアイだったがまたパンツが引つかかつて転んでしまい今度はお尻から丸出しに。

幸いなのは、周りには悟以外の人影はおらず、目撃者が他に居ないことか。

「あー…。もう、気をつけなよ…」

とりあえず目を逸らしながらイビルアイを抱き起こしてやり、試着室に戻してやる悟。

「ううう…」

試着室の中でしたららくモゾモゾとしていたイビルアイだがやがてカーテンを開けて外に出てきた。

肩を落とし小さくなったイビルアイはもう着替える気力がなかったのかパンツルックである。

「あー…。それじゃあ行こうか」

「うん…」

イビルアイはコートと帽子を被り悟に差し出されたガスマスクとゴーグルをうつむいたまま身に着けるとすつと悟の手をつかむ。

悟はそれを優しく握り返してやり店員の「ありがとうございますごさいますー」という明るい声に見送られながら次の店に向かうべく外へ歩き出した。

ちよつと凹んだ様子のイビルアイにどう声をかければいいのか考えあぐねていた悟だったが。

「あ、忘れるところだった」

店の裏手の方へ回り込むと人の眼がないのを確認し購入した服をインフニティ・ハヴァザック無限の背負袋の中に放り込んでいく。

両手に余るほどの買い物袋が瞬く間に吸い込まれていくのを見て悟の顔に笑みが浮かぶ。

「こりや便利だなあ…」

悟は少々子供っぽくはしやぎながらすべての荷物をしまい終えろと再びイビルアイに手を差し出す。

「じゃあ今度こそ行こうか」

「なんというか、空気が読んでいるのかいないのか…。」

「ああ、行こう」

少し肩の力の抜けたイビルアイも悟に手を伸ばし、二人は今度こそ次の目的地へと歩き出した。

第7話 アイちゃん買い物に行く・後編

衣類を購入したあと、さらに店をめぐり必要な家具、寝具、家電などの大物を購入した二人は再びアーマード・バスに乗ってショッピングモールへと向かった。

「…そういえばアイの居た世界にもバスってあったの？」

異世界の人間が現代に転移!? なんていうお話では定番である「馬車が馬無しで走っている!?!」というようなりアクションがそういえばなかったなとふと思いついた悟がなんとなくイビルアイに問いかけてみる。

「んっ? ああ、あったぞ。と言っても魔導王が作るまではなかったがな」

「また魔導王か…」

ちなみに動力がアンデッドなのは公然の秘密であり言わぬがフラワーというやつである。

「見た目はここまで物々しくなかったがな」

「まあ、この辺も一部の地区は物騒だからな…」

線路のように完全に決まったルートを走れる鉄道と比べ、路上を走るバスは地雷や有刺鉄線、電流柵などの固定式の防衛装置で守るにも限界があるため治安の悪い地域を通る路線のバスは武装が施されているのが普通である。

もつとも今二人が乗っている路線のバスは装甲に電流が流れる仕掛けがある程度の軽装備なバスだが。

そんな話をしている間にショッピングモールへの到着を告げるアナウンスが車内を流れる。

二人がショッピングモールに到着した時刻は13時を過ぎており、悟は少々空腹を覚えていたためまずはフードコートで食事を摂ることとなった。

「思ったより時間がかかったからさっさと済ませようか」

そんな感じで二人はあまり混雑していない店舗を選び注文をする。悟は合成玉子丼を頼み、リアルの食文化がよくわからなかったイビル

アイもじゃあ同じものと注文する。

テンションの低そうな店員が丼を取り出し、保温器から規定量の合成粉末成形米を盛り付け、その上に卵と醤油風味の味付けと卵色の着色を施した合成蛋白ゼリーをベチャツとよそえば完成なのですぐに提供される。

「ありがとございあしたー」

店員のやる気のない挨拶に送られ2つの丼を持って席につく悟と向かい合うように座るイビルアイ。

「ずいぶん早く出来るんだな…」

「ファストフードだからね」

「ふうん、ファストフード早飯か…」

気のない感じでひとさじすくい取り口に運ぶイビルアイだったが…。

「う、うぷっ…。な、なんだこれ…」

ズルズルとした不快な舌触りに混じるボソボソとした粒、口に含んだ瞬間鼻に抜ける薬品臭、舌にズシンとくる合成化学調味料の味、喉を焼いていくガラガラとした塩味。

長いこと生きてきたイビルアイとしても初体験の味である。

「う…うえ…」

流星に吐き出しはしなかったが一口だけで気が滅入ってしまった。

「アーコロジー外の食事なんてみんなこんなもんだよ。…まあ、これは普通に外れな味だけど」

気にした風もなく丼をかき込む悟だが、若干眉間に皺が寄っている。ピークはやや過ぎたとは言え昼時に人が並んでいなかったことに理由はあったようである。

「まあ諦めて食べような」

そう言つて無表情に食事を続ける悟。諦めきつているのだ。

イビルアイもうぐうぐうと言いながらもなんとか完食し立ち上がる。

「もうなんだか、しばらく食事は取らなくて良い気がする…」

「あー…、なんかごめん」

保護者が子供に食べさせず一人で食べているのはおかしいと思っ

てイビルアイにも食べさせたのだが…。

「もういい。気を取り直して買い物しよう」

「ああ。とりあえず一周してどんな店があるか見て回ろうか。それでほしいものを吟味して二週目で買う感じで」

「わかった。任せるよ」

イビルアイに手を差し出す悟。その手をおずおずと掴みながらイビルアイがぼやく。

「なんだか少し気恥ずかしいな…」

「あく…。でもはぐれたら厄介だし…。アイは携帯端末…。いや、連絡取るための手段持ってないしさ」

「いや、《メツセージ／伝言》を使えばはぐれたときの連絡くらい出来るが…」

「そんな魔法みたいに都合のいいものが…」

『あるぞ』

突如頭のなかに響くイビルアイの声。

『あるのか…』

そして、なぜか魔法を受けた瞬間に理解出来るメツセージの使い方。

また検証するべきことが増えてしまった気がする。

『たしかにこれならはぐれても大丈夫だな…』

そういつてイビルアイの手を握る手から力を抜くがイビルアイの手は離れない。

「？」

「…まあ、はぐれないに越したことはないだろう？」

「…それもそうだ」

悟はイビルアイの手を再び握り、二人はショッピングモールの中を歩き始めた。

「しかし、広い店だな…。これは幾つもの店が合同で出資してこの建物を建てたのか？」

幾つものテナントが立ち並ぶ通路を物珍しげに見渡しながらイビルアイが尋ねる。

「えっ？ どうだっけ…？ ショッピングモールを建てた企業があつてそれにいろんな店が出店しているような形だったっけ…？」

悟もそれほど詳しくないので上手く答えられない。

とは言え別にイビルアイも本当に答えを知りたくて聞いたわけでもないのかまわらないのだが。

ほかにも興味深いものを見つけると悟へと質問が飛ぶ。

「アレは何だ？」

「ゲームコーナーだよ。えっとゲームって…どう説明したら良いのか」

「いや、なんとなく知っているから良い。ふーん、あれがげえむか…」「やっていく？」

「いや、いい。それより買い物しよう」

そんな感じにあつちにフラフラこつちにフラフラと一周し、そろそろ本格的に買い物をするようか、という時に…。

——ズドンツ!!

「キヤー!」「うわっ!?!」「えっ、なに!?!」

『ジリリリリリリリリ…』

突如響き渡る爆発音。照明が落ち、非常灯に照らされる中人々が上げる困惑の悲鳴と、それを切り裂くように鳴り響く非常ベルの音。

イビルアイは突然の事態に身構え、警戒態勢を取るがその時うつかり悟の手に力を込めてしまい悟が少々うめき声を上げたが気付かない。

「何が起こったんだ？ 何者かの攻撃か？」

「ちよつと、イビルアイ…痛い…」

「あつ！ すまない」

ようやく悟の手を握りしめていたことに気づいて慌てて手を離す。

握られていた手の痛みを逃がすようにひらひらと振りながら。

「ガス漏れ事故でもあったのか…。ああ、テロかもしれない」

「テロ?..」

「こないだもそんなニュースあったからな」

たしか、ユグドラシルが終了しイビルアイが来た日の翌日、そんな

ニュースを見た記憶がある。

「ええと、実行犯と警察官一名が殉職、だつたっけ…?」

まあいいや、自分とは関係のない世界の出来事だ、などと思つていたが…。

「…とにかくさつさと帰ろうか」

「えっ?」

「これがテロだつたら爆弾が一発とは限らない。人が集まったところで二発目、三発目が爆発する可能性がある」

悟はふにつと萌え考案の『誰でも楽々PK術』の内容を思い出しなから話す。

「詳しいな…?」

「まあちよつとね」

ゲームの中では極悪集団を率いて大暴れしていたのだ。テロ行為もお手の物である。

あたりを見渡し、柱に掲げられていた館内案内図へと近づく。

「…うーん。テロリストがなるべく多く人を殺したいならここここが危ないかな…?」

追加で爆弾が仕掛けられていそうな場所をリストアップしていく。

「こうしてみるとなんだかこのショッピングモールは狩場みたいだな…」

爆弾を仕掛けやすそうな場所が多すぎる。今二人がいる通路は広い場所なので大丈夫だとは思うが。

「これはむしろ下手に動かないほうが良いかもしれないな…。ああ、でも延焼したら…。ガスマスクはしておいたほうが良いかな?」

そんなことをブツブツと真剣に考える悟。

そこにおずおずとイビルアイが尋ねる。

「なあ、怪我人が出ているかもしれないなら救助には行かなくて良いのか?」

冒険者は助け合いが基本だし、外で困っている者を見かけたら声をかけたりもする。

もちろんそれは無償の奉仕などではない。報酬は要求するし、その

ような救助行為が自分たちの名声を高めより高位の冒険者へと登るための礎となるからだ。

得にならないと判断したときの冒険者は極めて冷たい。

だが、『誰かが困っていたら助けるのは当たり前』と言った悟はどうなのだろうか？

「無理だよ。テロなら多分、そろそろ二発目が救助に集まった人間を狙って爆発する」

「え？」

その直後――。

――ズズンツ!!

「うわああっ!」「きやー!!」「また爆発したぞー!!」

二度目の爆発音。更に上る悲鳴。周囲の混乱もますます大きくなり、走り出す者も出てくる。

「こうなると不味いな…。出口が一部封鎖されていて逃げる人を集めるとかもあるかも…。どう脱出するのが安全だ…?」

イビルアイが爆発を見抜いた悟に驚いたような目を向けるが、悟は気にした風もなく考え込む。

とりあえず今の悟には誰かを助けるために動こうという意思はないようだ。

そしてイビルアイにも、自分の正体が露見するリスクを冒してそこまでする理由はない。

「なあ、サトル。私は《テレポート／転移》を使えるぞ。サトルの部屋も転移先に登録してある」

「マジか」

何でもありだな…。と小さく呟く悟。

「それで帰れるならそれで帰ろう。向こうに人の死角になりそうな場所があるから魔法を使うならそこで」

コソコソと移動する二人。停電で監視カメラは停止しているのでそれに映る心配もない。

「さて、では行くぞ…。《テレポート》」

「おおっ?」



そして次の瞬間、一瞬にして悟の身体は自宅へと戻っていた。

「なにこれすごい…」

土足のまま転移したので靴を脱ぎながらイビルアイが自慢げに答える。

「そうだろう。テレポートが使えるような魔法詠唱者マジックキャスターは魔導国では私と魔導王くらいのもものだからな」

「うん、すごいな…」

呆然と眩きながら悟もまた靴を脱ぐ。

ゲームの中では当たり前のように使っていた転移魔法だが、リアルになると本当に便利だ。

「でもショッピングモールで買い物はできなかつたな」

「ああ、そうだな…。今からもう一度、別のショッピングモールに行く？」

帰宅時間が大幅に短縮されたためもう一度出かける時間くらいはあった。

「んー、そうだな…」

イビルアイは悩む。正直なところショッピングモールを見て回って買いたいと思ったものは結構あった。

「次に休みがあるのはまた7日後だからそれまでは買い物に行けないし」

「む…そうか…。そうだな。まだ時間があるなら…」

結局そう結論付け、二人は再び、今度は近所にある先程行ったものより若干小規模なショッピングモールへと出かけることにした。



「ただいま…っと」

日も落ちたころ二人は今度は玄関から、軋むドアを開けて帰宅し

た。

「ちよつと疲れたな…」

営業で外を歩き回る仕事の悟だが、女の子お二人で買い物という事態には慣れておらず少々疲れ気味だった。

ガスマスクを外しながら首を回しコキコキと音を立てる。

「そうか。じゃあ風呂は先に入るといい。私は後で入るから」

気を使ったのか、疲労無効のイビルアイがガスマスクを外しながら風呂を勧める。

早く身体を洗ってさっぱりしたほうが気分もいいだろうと。

「じゃあそうさせてもらうかな」

その厚意にそう答え、悟は風呂場へ向かおうとするが、そのまえに携帯端末が着信を告げる。

「あー、電話だ。アイ、先に入っているよ」

「…わかった」

イビルアイが風呂場に向かうのを見届けながら電話を繋げる。

「はい、もしもし」

『お世話になっております。私クレジットカード会社のサービス担当のものです。こちらはスズキサトル様のお電話でよろしかったでしょうか?』

「はい、鈴木は私です。なにか?」

『はい、実はスズキ様のクレジットカードにデータ盗難の可能性がありまして確認のお電話をさせていただきました。現在クレジットカードはお手元にございますでしょうか?』

「ええ!?… なんて!?!」

『はい、実は昨日から今日にかけてお客様が普段ご利用しないような店での多額の使用が確認されました。それで念のために購入内容についてお電話をさせていただきました』

心当たりはありすぎる。

「あー、大丈夫です。全部俺が買ったものだと思います。ちよつと人と付き合い始めまして…」

『左様でございましたか…。ですが…その…プライベートに踏み込む

ようですが大丈夫ですか…？ その…こんな金額を…？」
貢がされているんじゃないかと心配しているのだろう。

「…大丈夫です。ちゃんと分かっていますから」

『それでしたらよろしいのですが…。では、お騒がせしました。この後のご愛顧をよろしくお願いします』

「はい、ご苦勞様です」

『では失礼します』

通信が切れ、やれやれとため息を吐きリビングの椅子に座り込む悟。

風呂を終え湯気を上げるイビルアイが呼びに来るまで悟はそのままの姿勢でぼんやりとしていた。

「どうしたサトル？」

「ん、ああいや、大したことじゃないよ」

声をかけられ悟も気を取り直しイビルアイを振り返る。

イビルアイは可愛らしくデフォルメしたコウモリがプリントされたゆつたりとしたパジャマに身を包み、ほんのり頬を上気させ悟を見下ろしていた。

フンスと鼻から息を吐き、口角を僅かに釣り上げクイツと顎を上げるイビルアイ。なかなかのドヤ顔である。

「そのパジャマ可愛いね、似合ってるよ」

「あまり心がこもっていないがありがとうと言っておこう」

そんな雑なやり取りをしつつ悟は椅子から立ち上がる。

「それじゃ俺も風呂入ってくるから」

「ああ、いつてらっしやい。そうだ、先に荷物を開けていていいか？」

「どうぞー」

悟がスチームシャワーを浴び身体を手早く清め部屋に戻ると…。

「随分…散らかしたな…」

インフイニティ・ハザアザック

無限の背負袋にしまわれていた荷物は全て取り出されており、そのいくつかは梱包も解かれている。というか、まあ…。

「服はせめて収納を出してから開けたほうがいいんじゃないか？」

樂しそうに服を並べていたイビルアイが眉をしかめる。

「いいじゃないか別に……。順番なんて……」

そういういつつイビルアイも内心では悟の言葉のほうが一理あると思っている感じの顔なので悟もそれ以上は突っついてやらないことにした。

悟は溜息をつくといビルアイの隣に座り込み収納具が入ったダンボールの開梱を始める。

「俺が先にこっち開けるから、アイはしまえるものはこっちに貸してくれ。片付けるから」

「わかった。あ、下着はいいぞ自分でやる」

「わかってるよそれくらい！」

そんな感じで二人の初デートは成功裏に終了した。

第?話 アイちゃんとクリスマス・イヴ

「乾杯」

薄暗い店内で悟とイビルアイ、二人の声とともにクラスが軽く合わされる。

悟のグラスに入っているのはちよつと奮発したバイオワイン。イビルアイのグラスに入っているのもバイオオレンジを使ったフレツシユジュースである。イビルアイの見た目と年齢の差異をいちいち店員に説明したりするのが面倒なので。そもそも吸血鬼は酒で酔えない。

今日の二人はクリスマス・イヴということもあって少し贅沢に、アールコロジー外の店としてはそれなりに上級の店を予約して食事に来ていた。

クリスマス・イヴということもあり落ち着いた店内はカップルや家族連れで満席になっていた。悟たちも2ヶ月も前から予約をしなれば席を確保できなかつただろう。

ワインをひとくち口に含んで難しい顔になる悟。

「無限のワイン瓶のほうが美味しい気がする…」

結構した割にあまり感動するほどのものではなかつた。

合戦酒よりは美味しいのだろうが、悟は最近ほとんど飲んでいないので比較対象としていまいちピンとこない。

「そうか、こっちはまあまあかな? 多分」

「俺もそつちにしておけばよかつたかな…?」

「やらんぞ」

「大丈夫、いらないから」

そんな風に会話を楽しみながら料理を待っていると外の奇妙なざわめきをイビルアイは感じ取つた。

「なんだ? 何か外が騒がしいぞ?」

「そうか? 俺は聞こえなかつたけど」

「いや、何か騒いでいる。何かあつたのか…?」

「クリスマスだし酔つ払いが騒いでるんじゃないのか?」

「そのくらいならいいんだがな…。念のため…」

イビルアイが手を上げ悟に補助魔法をかけようとした。
その時だった。

—— KABOOM!!!

突如として巻き起こった目も眩む閃光。叩きつけられる衝撃波。
舞い散る破片。そして熱風。

戦闘態勢に入っていなかったイビルアイはいきなり飛んできた
テーブルの天板を躲しきれず直撃を受け、体重の軽さもあって吹き飛
ばされてしまう。

様々なガレキとともにゴロゴロと転がるイビルアイ。

高位吸血鬼であるイビルアイには魔力のこもっていない攻撃は無
効であるため痛みはないが、体中に降り注いだ細かなガレキと埃でお
めかししてきた衣服は汚れてしまった。

「何が起こった…?」

頭を振って埃を払いつつ立ち上がり、周囲に目を向ける。

—— 周囲は爆撃を受けたかのような地獄絵図が広がっていた。

イビルアイは知る由もないが、貧困層の中の貧富の差を妬んだ最貧
困層が仕掛けた爆弾テロにより店内に仕掛けられた4つの爆弾が同
時に起爆したのだ。

それによつて店内は粉碎され、あらゆる調度品がぶちまけられ爆弾
の破片とシエクされ煙を上げていた。

もちろん店内の人間も無事ではなく、あちこちで火傷と傷を負った
客たちが苦痛と助けを求めるうめき声を上げ、目の前には血の滴る誰
かの右腕が落ちている。

「はっ!? サトル!? サトル無事か!」

慌ててあたりを見渡すと、幸いにもすぐに少し離れたテーブルの下
敷きになってうめいている悟の姿を見つけた。

「サトル!」

「あ…ああ…、いってえ…」

頭から血を流しながらうめき声を上げる悟に駆け寄りイビルアイ。
そしてテーブルをどかすと悟の姿に息を呑んだ。

右腕はおかしな方向にネジ曲がり右足には大きな裂傷が出来ている。そして右胸には太い金属の部品が突き刺さっていたのだ。

即死する傷ではない。だが、このままでは命にかかわる致命的なダメージだ。

「ああっ！ サトル！ サトルうっ！」

イビルアイは歯噛みする。信仰系魔法詠唱者ではない自分は回復魔法を使えない。さらに、今日はデートだからとおめかしするため無限の背負袋とその中に入っているポーションを持ってきていなかったのだ。

今の自分には悟を救う手段がない。

—— 否、一つだけ、イビルアイには悟を救う手段があった。

(サトルを…眷属にすれば…)

だが、それは悟を自分と同じ永遠に呪われし夜の化物に変えるということだ。

自分の愛する男を。自分と同じに。

ひどく甘美な誘惑でもある。そうすれば悟は永遠にイビルアイのものになる。

たとえ自分と同じ苦しみを味合わせることになるとしても悟は永遠に自分と一緒に居てくれるようになるのだ。

「サトルう…」

イビルアイは泣きそうな顔で悟の顔を覗き込む。

悟を救うにはこれしかない。大義名分はある。だが…悟はそうまでして本当に助かりたいだろうか？

自分は吸血鬼になって大いに苦しんだ。もし人生をやり直せるなら、250年前のあの日あの時に戻れるのなら、自分は吸血鬼になどならず済むように行動するだろう。

—— それでも、それでも自分は悟を失うのが嫌だ！

「サトル…」

少し決意を固め悟の苦しそうな顔を見つめる。

その瞬間。

「アイ…たす…けて…」

苦しげな顔であえぐように、それでも決断を感じさせる目でイビルアイを見つめる悟。

悟もイビルアイが何をしようとしているのか気づいたのだ。

そして、その最後の一步は自分で踏み出さなければいけない。イビルアイだけに決断を任せてはいけないと本能のように感じ取っていた。

イビルアイを愛する鈴木悟として、自分の決断でイビルアイと添い遂げなければいけないのだと。

イビルアイの顔に決意がみなぎる。

たとえばどうなっても、悟を死なせたりしない。

「サトル…。愛してる」

人間と吸血鬼としての最後の口づけを交わし、イビルアイは悟の首筋に牙を突き立てる。

そして、愛する男の血液が自分の体内に流れ込んできた瞬間、イビルアイは新たなスキルの芽生えを感じた。

そのスキルは『王族化』。『吸血姫』が生涯ただ一度だけ使用できる『吸血貴』を生み出すスキルである。

一瞬戸惑ったが、イビルアイは迷うことなくスキルを使用する。

やがて悟の心臓が止まり、悟はイビルアイの『ヴァンパイア・プリンス』としての二度目の生を受けた。

「サトル…」

しばらくの時間が経ち、スキルの完全なる発動を感知したイビルアイが悟の首筋から口を離し、悟の顔を覗き込む。

「サトルっ…い！」

イビルアイの呼びかけに応えるように悟が目を開いたが…。

「うっ、ぐがあ!!?」

悟が全身の違和感に絶叫する。

胸の中から何かが何かに押し出されるように盛り上がっていき…。

「サトル!? 大丈夫か!?!」

「ぐあっ!?!」

血しぶきとともに悟の体内に埋め込まれていた人工心肺装置が排

出される。

同時に後頭部に埋め込まれたジャックも排出され床に落ちた。

その傷跡は見る間に塞がっていったが、イビルアイは慌てて悟を揺する。

「サトル!?! サトル…! 大丈夫か!?!」

「ああ…。遙かにいいよ…」

身体に埋め込まれた機械類が肉や骨を突き破って排出され、折れたはずの腕がメキメキと音を立てて治っていく様子には少々冷や汗もかいたが、今や全身には凄まじい力がみなぎっていた。

今までの身体とは何もかもが違う。

「これが吸血鬼の力か…」

その言葉を聞いてイビルアイは思わずサトルから目を逸らしてしまふ。

本当に悟を吸血鬼にしてしまったという悔恨の感情が湧き上がってきたのだ。

「ああ、サトルは…、もうこれで…」

「アイ」

強い口調でイビルアイの言葉を遮るサトル。

イビルアイが悟の顔を見上げれば、悟は力強い笑みを浮かべてイビルアイを見つめていた。

「アイ。助けてくれてありがとう」

「サトル…」

「愛してるよ…。キーン…」

そのまま二人の影が一つに重なる。

こうして、やがて夜の王者として永遠に地球に君臨する吸血鬼カッブルが誕生したのであった。

第?話 アイちゃんとクリスマス

冷たい重金属酸性雨が降る中、悟は家路を急いでいた。

とある品物の受取のために寄り道をしていたためイビルアイに告げていた帰宅予定時刻より少し遅れ気味なのだ。

「ただいま〜」

少し息を切らしながらいつものように悲鳴のように甲高い音を立てる玄関を開けて帰宅する悟。

「おかえり! サトル!」

いつものように駆け寄ってきたイビルアイとガスマスクを外した悟は軽く口付けを交わす。

本当なら今すぐにでも抱きしめたいのだが、汚染大気と重金属酸性雨によって汚れた身体でイビルアイを抱きしめるのは躊躇われる。

「今日は少し遅かったな? なにかあったのか?」

「うん、まあちよつとね。大したことじゃないんだけど…」

笑顔のイビルアイにコートと上着を渡しながらごまかすように悟も微笑む。

その笑みを見てイビルアイは悟がなにかごまかしているなという確信を得たがあえて深く追求はしない。

悟がごまかしていることが何か『イビルアイに悪いこと』なら、彼の胆力ではこんな軽い感じでごまかすことは出来はしないのだから。

「ふーん。まあいい、さっさと風呂に入ってこい。今日は腕によりをかけたぞ」

「ああ、そうする。楽しみにしてるよ」

上着とコートを魔法で清めながら微笑むイビルアイと再び口付けを交わしお風呂に向かう悟。

「早く上がってこいよ〜」

「はいはい」

脱衣場で忘れずにポケットの中の小箱を部屋着のポケットに移してからバスルームに入る。

スチームバスで身を清めながら小箱の中身に思いを馳せ、少し気合

を入れ直した。



イビルアイが作った普段より豪華なクリスマスディナーを食べ終えた二人はリビングのソファに座って寛いでいた。

「…なあ、アイ」

「んー？」

悟の胸に頭を預けとでもリラックスしていたイビルアイが目を開けて悟の顔を見上げる。

悟は少々緊張した面持ちで言葉を選ぶように口を開く。

「ええと…。ちよつと大事な話があるんだ…」

「なんだ？ こんな日に…？」

「まあ、こんな日だからというか…」

「ふーん…？」

何かを感じたイビルアイもだらけていた姿勢を正し、悟と向かい合う。

一度深呼吸し意を決して口を開こうとする悟だったが。

「あ、そうだ。私も一つ話があるんだ」

「うえっ？」

出鼻をくじかれた悟が変な声を上げるが、イビルアイは微笑みながら言葉を続ける。

「キーノ・ファスリス・インベルン。それが私の本当の名前なんだ」

「キーノ…？」

「そうだ。それが本当の名前」

なぜ今のタイミングで…、と一瞬ほかんとする悟だったが、すぐに思い当たり頭を掻く。

全てお見通しか…。

「キーノ…」

そつとイビルアイの左手を取る悟。

「愛している。俺と結婚してくれ」

ポケットから小箱を取り出し蓋を開けると、そこには小さな指輪が収まっていた。

「サトル…っ」

その言葉を受けみる顔が緩んでいくイビルアイ。そして感極まったように悟に抱きつく。

「おわっ」

「サトルっ！ 嬉しい!!」

急に抱きつかれて危うく小箱を落としそうになりながらも、イビルアイを抱きしめ身体を擦り寄せる悟。

「まあ、籍を入れたりするわけじゃなく、精神的なものだけどさ…」

「うん…、それでも嬉しい…」

少し身体の間隙間を開け、もう一度イビルアイの左手を取る悟。

そしてその薬指に指輪を通し…。

「キーン…。死が二人を分かつまで、俺と一緒に居てほしい」

「うん…。死が二人を分かつまで、私はサトルと一緒にいるよ…」

静かに目を閉じるイビルアイを抱き寄せ、口づけする悟。

体をなで合いながら優しくソファアの上に寝かせ、唇を離し、しばし見つめ合う。

「サトル…」

「アイ…、いや…。キーン…」

再び二人は身体を寄せ合い…。

ピーンポーン

無粋なドアチャイムの音が二人の邪魔をした。

「…」

「…」

ピーンポーン

「何だよもう…」

ぶつくさ言いながら玄関へ向かう悟。

扉越しに誰何の声をかける。

「どちらさまで？」

「宅急便です。スズキサトルさんにお荷物届いています」

「こんな日にご苦勞様な…。」

「はい、今開けますよ」

悲鳴のような音を立てながら玄関ドアを開け荷物を受け取る悟。

「ではこちらにサインか印鑑を」

「はいはい」

「…はい、ありがとうございます」

「ご苦勞様です」

「はい、では失礼します」

そんなやり取りを終え悲鳴のような音を立てながら玄関を閉め、鍵を3つ掛ける。

そうしていると、来客が済んだことを気配で察したイビルアイがリビングから顔を覗かせた。

「なんだったんだ？」

「うん、荷物だつて。ええと、送り主は…『ユグドラシル運営』…?!」

驚いた悟は足早にリビングに戻りつつ、箱を開ける。

興味津々に覗き込むイビルアイを尻目に幾つもの緩衝材を取り除いていると、中から一枚のメッセージカードが出てきた。

その内容は…。

『毎年毎年クリスマス夜の夜にもかかわらずユグドラシルをプレイしてくれていた貴方たちだけに』……つて……。まさか…』

カードの下に敷かれていた最後の緩衝材を退けると、そこには…。

「し、『嫉妬^運する者^狂たちのマスク^{か?}』…!!」

そう、これこそが12年間に渡って毎年クリスマス夜にユグドラシルを2時間以上プレイし、嫉妬する者たちのマスクをコンプリートした極一部のプレイヤーのみにプレゼントされた、ユグドラシル運営最後のサプライズである。

「何考えてんだよもう…」

へなへたと全身の力が抜けていくのを感じる悟。

嫉妬マスクを取り出し、しばしマスクと見つめ合う。

「なんだそれ？ 変なマスクだな？」

悟が持ち上げたマスクを興味深そうにつつくイビルアイ。

すると次の瞬間――。

パキーン！

「へっ!？」

「あれっ!？」

二人共特に力を入れたわけでもないのに嫉妬マスクがまっぷたつに割れてしまったのだ！

もちろん原因は成形不良による強度不足なのだが、そんなこと想像もしていなかった悟とイビルアイはオロオロと狼狽える。

「え、ええ!？ ど、どうして!？」

「なんでいきなり!？」

そんな二人を真っ二つになったマスクがそれぞれの破片で泣いているような、怒っているような、形容しがたい表情で睨むように見つめていた。

第?話 アイちゃんと節分

今日も悟は軋む玄関扉を開けて帰宅する。

「ただしい……」

「災いよ立ち去れー!」

「まつ!」

べちっ! と音を立てて悟の顔に張り付いたのはインゲン豆によく似た青々としたサヤ付きの豆。

そしてそれを投擲したイビルアイは至って真剣な表情である。

「幸福よ来たれー!」

べちっ!

「……………」

「……………」

天使が通り過ぎること数秒。

先に口を開いたのは顔から豆(インゲン豆によく似たサヤ付き)を剥がした悟だった。

「ただいまイビルアイ」

「あ、ああ、おかえりサトル」

その堅い表情と声質から自分は何か間違えたんだろうなということとを察した感じのイビルアイも挨拶を返す。

「何を勘違いしたのかは何となく分かるけど、とりあえず一言言うなら食べ物粗末にしない」

「ああ、やはり間違っていたか…」

「うん、普通はこういうのを撒くんだよ」

そう言ってコートのポケットから『フェイク・イリマメ(生分解性プラスチック製・50粒入り・税抜き400円)』の袋を取り出しイビルアイに手渡す。

受け取ったイビルアイはしげしげと袋を眺めながら。

「随分硬質な豆だな。変にツヤテカしてて…。まずそう」

食べる気満々なイビルアイを慌てて悟が止める。

「食べられないよ! プラスティック製だから! それは撒くだけ」

「え？ でもなんか、歳の数だけ食べるとか聞いたぞ？」
「そんなの余裕がある人だけだよ。煎りバイオ大豆とか高いし。普通の家は精々合成豆のグラノーラでも食べるくらいさ。…と言うか食べるの？ 250個…」

歳のことを言われて段々ふてくされたような表情になっていくイビルアイだが観念したようにカクンと頭を落としてつぶやく。

「……食べない……」

「そういうこと。じゃあ風呂に入ってくるからまた後でね」

「分かった。食事の用意をしておく」

「あと…これ……」

「あ、うん……」

と、先程顔に張り付いた豆（インゲン豆によく似たサヤ付き）をイビルアイに手渡し、悟はバスルームへ向かうのであった。



「ふー、きつぱり……」

などと言いつつ湯気を上げる悟がバスルームから戻ると、既にテーブルの上には今晚の食事が用意されていた。

内容は主になにか黒くて太い棒状の物体である。

え？ みたいな顔をした悟にイビルアイは得意気に説明する。

「今日は法国料理の『エホームマキ』を作ってみましたぞ。りあるでも今日食べるとテレビで聞いてな」

「異世界にもあるのか恵方巻き……」

昔のスーパーとかコンビニがでっち上げた風習なのに……。

「まあ、私は食べたこと無いから想像で作ったんだけど」

爆弾発言。

「いきなり不安だ。と言うかやめなよそういう意味不明にアグレッシブなクリエイティブを發揮するの」

「大丈夫、ちゃんと味見はした」

「調べてから作れってこと！」

「いったーねつとはなんとか使えるようになったけどまだ漢字は難しくてなあ…」

「あー…、いや…。そうか…」

悟もだいぶイビルアイとの生活に馴染んでいて忘れがちになっていたが、イビルアイはまだ日本に来て日が浅い。1人でなんでも出来るというわけではないのだ。

「もういいや…。とりあえずもう食べよう」

「ああ、そうしよう」

そうしてへ？恵方巻きへ手を伸ばしたサトルをイビルアイが止める。

「まてまて、たしかエホーマキは東の方角を向いて食べるんだろう？」

「そうだっけ？ あんま知らないんだけどアイがそう言うなら…」

と、二人仲良く今年の恵方とはなんにも関係ない東を向いて恵方巻きに齧りつく。

むしやりむしやりと無言でへ？恵方巻きへを頬張る二人。

そしてポツリと悟が…。

「さほど美味しいものじゃないな」

「もつとストレートに不味いつて言ってもいいぞ」

「味見したんじゃないの？」

「全部まとめてはしなかった…」

食材一つ一つの味見はしたがトータルでの味の調和までは確認していなかったイビルアイだ。

実際に食べてみると米の代用として片栗粉でとろみを付けた細切れのパスタと海苔の代用にした非常用弁当箱エマーゼンシーランチボックス(副菜)から出したなんか黒っぽいうえやたらスパイシーな乾燥葉野菜がやけに歯と喉に絡みつき不愉快で、中に入っている豆(インゲン豆によく似たサヤ付き)の苦味と青臭さが香草焼きにした魚のほぐし身と乾燥葉野菜のスパイシーさと甘く焼いた卵焼きの甘さが味の不協和音を奏で非常に舌に五月蠅い。

たしかに一つ一つなら美味しく食べられたのかもしれないが…。

「……ノルマは3本ずつな。私も食べるから…」

「……今からでも解体してバラで食べないか？」

「……それでもいいけど……」

そんな感じにグズグズにグダグダな夕食を平らげ、リビングに向かいようやく落ち着いて食後の一服タイムを過ごす二人。

お茶を飲みながら口直しにお菓子などをつまむ。

「あれでなんか、本当に幸運とかが舞い込んでくるのかな？」

「もういいじゃないか……。変なものを作った私が悪かったから……」

「……うん。でも言いたかったんだ」

「ぐぬぬ……」

むくれるイビルアイの可愛らしい様子に少し溜飲を下げた悟もそれ以上は突っつかず、話題を変える。

「それじゃあ買ってきた豆で豆まきでもしようか」

「お、そうだな！」

実は結構楽しみにしていたイビルアイがぴよんと飛び上がって肯定する。

先程悟から預かったフェイク・イリマメの袋を取り出すと早速封を開ける。

「じゃあはんぶんこな」

「ああ、ありがとうアイ」

ザラザラと手のひらの上に半分より少し、いや、割と少なめの豆を受け取り、軽く手のひらの上で転がす。

「あんまり量がないからひとつまみずつ投げるか……。鬼は外ー！」

バラバラと立てて悟の投げたフェイク・イリマメがフローリングの隅に転がる。

「災いよ立ち去れー！」

ベチベチと音を立ててイビルアイの投げたフェイク・イリマメが悟の頬を直撃する。

「……福は内ー」

バラバラ。

「幸福よ来たれー！」

ベチベチ。

「…なんで俺に投げるの?」

問いかけられたイビルアイがむしろ不思議そうに尋ね返す。

「むしろなんでサトルは私に投げないんだ? セツブンってのは豆を全力でぶつけ合う祭りだと聞いたが」

私が全力を出すと悟が死ぬからそこは軽くやったが、とドヤ顔で続けるイビルアイに思わず「誰にだ!」と詰問しそうになったが口を開く前にふと思い出す。

少し前に、何かの拍子に「節分といえばユグドラシルで人間と異形種に分かれて豆を全力でぶつけ合って勝負をつけるイベントがあった」なんて話したのは悟だったということ。

「今更だけどユグドラシルのイベントは悪意に歪みすぎているのではないだろうか…」

などと小さく愚痴りながらもイビルアイに本当の節分の作法を教える悟。

しかし…。

「でもこっちのほうがおもしろいじゃないか?」

などのたまうニコニコ顔のイビルアイを止めることは結局できず、フェイク・イリマメが無くなるまでイビルアイに豆をぶつけられ続けるのであった。

第？話 アイちゃんとバレンタイン

甲高い悲鳴のような音を立てる玄関扉を開きながらガスマスクで顔を覆ったサトルが私を振り返る。

「それじゃあいってくるよ、アイ」

「いってらっしゃい、サトル」

軽く手を振りながらマスクに覆われて表情の見えない悟を扉が閉まる最後まで見送る。

それにしても見送りの際に素顔で挨拶を交わせないのはやはり少し寂しいものだななどどうでもいいことを考えながらキッチンへ向かい朝食の後始末を始める。

元の世界で仮面を付けて生きていた自分が言うことではないだろうが。

どうでもいい思考を打ち切り皿を洗いながら私は今日の予定に思いを馳せることにした。

この世界には色々愉快的イベントがあるが、今日のイベントはそんな中でも特になかなか愉快だ。

恋人たちの祭りの日に聖人を処刑し、その日にさらに重ねて恋人たちの祭りの日にするというのも皮肉が利いていて実に楽しい。

現代ではそんな伝承がどうねじ曲がったのか女性が男性にチョコレートをプレゼントする日になっているらしい。

チョコレートは甘くて美味しい。

私も日頃の感謝を込めてサトルにチョコレートをプレゼントしようと思ったのだが、プレゼントするチョコレートは手作りが良いときれているようで…。

あいにく私にはチョコレートを手作りするための素材の入手先や設備がなく悩んでいたのだが近所でなんと『手作りチョコレート講習会』が開かれるという情報を手に入れたのだ。

早速サトルから貰っている1ヶ月分のお小遣いの半分に匹敵する参加費を払って参加申し込みをした。

そして今日、その講習会が開かれる。

そこで作ったチョコレートをサトルにプレゼントしたらどれくらい喜んでもらえるだろうか…。

そんなことを考えながら鼻歌交じりに皿洗いに洗濯、掃除など一通りの家事を片付けチラリと時刻を確認する。

時計の針が示しているのは8時少し過ぎ。少し早い及早すぎるといっほどもない。

「よし、キリもついたらし着替えて出発するか」

ちよつとおしゃれな外出着に着替え、コートを羽織りゴーグルとガスマスクを被る。相変わらず視野が狭くて鬱陶しい。

まあそれでも着けて居なければ目立ってしまうので着けるしかないんだが。

玄関の扉に3つの鍵を掛け、薄汚れたアパートの通路を進む。

ニユースで見た天気予報では晴れとのことだったが…。

「ここに来て晴れている空なんて見たことがないな…」

人通りの少ない道を歩きながらどんよりとした化学汚染暗雲に覆われた空を見上げぼやく。

だが、そんな空の下で私は生きていく…。



しばらくのんびり歩き今日の目的地である私とサトルが暮らすアパートより遥かに立派なマンションに到着する。

サトルに聞いた話ではこのくらいの住居に住んでいるのが正確に言うとは違ふけど一般的な意味での所得階級らしい。

実際は下の上というところらしいが。

玄関脇のインターホンにメモしてきた部屋番号を入力し、名前と用件を告げ玄関の中へ。

私達の安アパートとは違ってこのマンションはホールまで空調が利いているのでガスマスクは必要ない。

開放感にホツとため息を吐きながら私はエレベーターに乗り込み目当ての部屋へと歩を進めた。

「いらつしやい。あらまあ、なんて可愛らしい生徒さんかしら！」

目当ての部屋で再びインターホンを鳴らした私を迎え玄関の扉を開けてくれたのは上品で美しい中年の女性。

彼女が講師をしてくれる先生なのだろう。

健康的で人の良さそうな少しふくよかな顔には満面の笑みが浮かんでいる。

「こんにちは、鈴木です。今日はよろしくお願いします。

「ええ、こちらこそよろしく。鈴木さん。さあ上がって」

コートを玄関脇のコート掛けに掛け、招かれるままにリビングに通される。

リビングには既に幾人かの女性が集まり談笑していた。

「開始までまだ少し時間があるからお茶でも飲んで待つていてくださいね」

「はい、ありがとうございます」

席を決める前にリビングを見渡す。

うん、私が最年少（外見だけ）だな。すでに室内の女性たちから興味深そうな視線が向けられている。

すすすつとテーブルの隅っこの方に腰掛けるも、あつという間に女性たちに囲まれてしまう。

「かわいいー！ お名前は？」

「え、ええと、鈴木アイです…」

「へー、アイちゃんね！ 今日のチョコは誰にあげるの？ 彼氏？」

それともご家族？」

「えつと、世話になつている兄に…」

「お兄さんかー。かっこいいの？」

「……それは」

「アツハイ…」

なんて感じにお茶請けのお菓子代わりにされた。



「では、これより手作りチョコレート講習会を開始します」
「「よろしくおねがいます」」

おもちゃにされてちよっぴり疲れ始めた頃、ようやく始まった講習会。

髪をまとめエプロンを身に着け気合を入れる私の前で講師の女性が手順を説明していく。

「まずはこちらにあるチョコレートブロックを細かく切り、ボウルで湯煎にかけてゆっくり溶かしながら…」

……手作りつてそこから良かったのか!?

バイオカカオ豆を入手するところからじゃなかったんだな…。

などと密かに驚愕する私。

——ちなみに原因はチョコレートの作り方を調べる際にイビルアイは「チョコ 製法」で調べたためである。

——彼女は未だ日本語が完全に堪能なわけではないのだ。
衝撃から立ち直った私はなんとか気を取り直し、チョコを作り始める。

サトルへの思いを込め丁寧に一つひとつの工程を進める。

溶かしたチョコを型に流し込み固め、トッピングをし、チョコペンで飾り付け文字を書き込む。

まだ余り上手に字が書けないため少し歪んでしまったが、それでも私の思いを込めた手作りチョコは順調に完成した。

そして講習会も終わり…。

「皆さんお疲れ様でした。別のお菓子作りの講習会も行っていますのでこちらにも是非参加してくださいね」

「「ありがとうございます」」

講習が終わったあともきやいのきやいのと盛り上がっている他の参加者の女性達を尻目に一目散に家に帰る私。

留まっているとまた何かおもちゃやお茶請け代わりに拘束されてお話責めにされてしまいそうな予感もしたのだ。

マンションから出て少し道を歩いたところで周囲を確認する。

「やて、きゃつさと帰るか…」

人目はどこにもない。浮かれていても吸血鬼の感覚は確かだ。

「《レポート／転移》」

まあ、急いで帰ったところでサトルが仕事を終えるのは夜なんだから早く会えるわけじゃないんだけど。

大事なものを持った状態で帰り道というのはなんとなく、気が急ぐのだ。



夕食の準備を終え暇を持って余しているとアパートの部屋の外からサトルの足音が近づいてくるのに気付いた。

ふっと口元が緩むのを抑え、軋みを上げる玄関扉を開いて帰宅するサトルを出迎える。

「おかえり、サトル！」

「ただいま、アイ」

笑顔で挨拶を交わし合う。

「食事の用意をしておくから、先にお風呂を済ましてきたらどうだ？」

「うん、そうするよ。よろしく」

「しっかりと洗えよ」

「わかってるって」

汚れたコートやマスクを受け取りながらサトルを風呂に押し込む。

しかししっかりと洗えと言ってもすぐ出てくる…なんだっけ、鳥の水浴び？なんだからなあ…。

その後案の定すぐに風呂から出てきたサトルと食事を済ませ、食器を片付ける間にサトルをリビングへ追い出す。

この後のことを想像しながら上機嫌に皿洗いをしていると、ボソボソと聞こえてくるサトルの独り言。

「…アイは随分上機嫌だったな…。バレンタインのチョコで良いものを用意できたのかな…？ バレンタインか…。アイから…。ふふふ…、ちよつと、いやかなり嬉しいかも…」

いつものことだが多分サトルはこの独り言が聞こえてないと思っ

てるんだろなあ。

たまに普段は言ってくれないような嬉しいことを言っていたりして少し楽しいこともあるから聞こえていることは絶対秘密だが。

しかしサトルには既にチョコを贈るつもりなことはバレているよ。うだ。まあ、私も隠しようがないくらい上機嫌だったしバレるのも仕方ないが。

冷蔵庫の中にしまっておいた可愛らしくラッピングしたチョコレートを取り出しリビングに向かう。

「お疲れさま。今日もありがとう、アイ」

「ああ、気にするな。サトルも毎日仕事を頑張っているんだから」

ソファアで寛ぐサトルの前に立つと、サトルも頭を上げ私を見上げる。

自分でも口元が上がっていくのが分かるのが少し恥ずかしい。

サトルもそれを見てか照れるように口元を緩める。

「メリーバレンタイン、サトル！ はい、これ！」

私は目一杯の笑顔とともにサトルにチョコレートを突き出した。

第8話 アイちゃんナンパされる

「ただいまー」

「おかえり、サトル」

仕事を終え帰宅した悟と、それを出迎えたイビルアイは朗らかに挨拶を交わす。

——イビルアイが悟のもとに転がり込んですでに数週間。既に二人のあいだの空気はたまにギクシヤクすることもあるが、それなりに硬さも緩み多少はリラックスした関係になっていた。

「今日もお疲れさま。早く風呂に入ってさっぱりするといい」

「ああ、ありがとうアイ。今日も腹が減ったよ…」

「ふふつ、食事もできているから楽しみにしているといい」

などと談笑をしながらイビルアイに荷物を預け風呂に向かう。こういう何気ない会話のやりとりも少しずつ慣れてきた。

「今日はどんな料理を作ってくれたのかな…?」

スチームバスを浴び身体の汚れを洗い流しながら悟は今日の夕食についてあれこれ考えていると、ぐううつと腹の虫が大きな声で空腹を主張し、思わず自分自身に苦笑してしまう。

「空腹に弱くなつたな…。少し前までは何かを食べたいなんて欲求を感じることもなくてなかったのに…」

かつてはいっそリアルでもゲームのようにアンデッドに成れば食事も休憩も睡眠もなしにユグドラシルを遊べるのに…、などと本気で考えていたのだから変われば変わるものである。

「さっさと出るか!」

ガシガシと頭を洗う手の動きを早める。たとえ急いでいても汚れ落としには妥協しない、できない。もう二度とイビルアイに臭いとか汚いとか言われたくない。

それほどの深い傷がイビルアイの一言サトルの不潔!によって悟の心に刻み込まれていたのであった。

風呂で身体を洗い終え、ホカホカと湯気を上げながらキッチンへ向

かう悟。

キッチンからは美味しそうなスパイスの匂いが漂い、悟の空腹をさらに刺激し、腹の虫がさらなる主張を始める。

「ふっ、元気がいいな…」

「いや…。だつて美味そうだから…」

照れ笑いをしながらテーブルに着く悟。食卓にはいつもながら色とりどりの料理が並べられ暖かに湯気を立てていた。

「今日は冒険者基本キットのレシピブックに書いてあったカレーライスという料理を作ってみたぞ」

イビルアイが食卓の中央に置かれた鍋のフタを開けると湯気とともにスパイスの香りが広がり悟の鼻腔をくすぐる。

「…すごい…。いい匂いだ…」

「まあ、上手くできているかはわからないがな」

などと謙遜しながらも心なしかドヤ顔なイビルアイ。

料理をつくるたびに悟がとてもいい反応をしてくれるので最近は料理を作る喜びにも目覚めつつあった。

イビルアイは楽しそうに合成白米を盛り付けた皿にカレーをよそつて悟のもとに差し出す。

「さて、冷めないうちに食べようか」

「ああ、いただきます」

手をあわせ食前の祈りを済ませると早速悟はカレーライスをひと匙すくい口に入れる。

「……………くっくっ！ くうっ…！」

カレーを口に入れた瞬間顔を歪め、小さく唸りながらプルプルと震える悟の様子にイビルアイはわずかに慌てて声をかける。

「どうした？ 大丈夫か？ もしかして辛かったか？」

しかし悟はその問いかけを無視し、やおら顔をあげるととろんと呆けたような顔でため息を吐きつつ。

「……………うまい……………」

エンドルフィン全開な表情でとろけたような言葉を漏らす。

「本当に美味しいよアイ。こんな、こんなに美味しいなんて…」

「大げさな……。そんなにか……」

そんなことを言いつつも口角がウニウニと上がっていくのが収まらないイビルアイ。悟はそんな様子に気付かず夢中でカレーライスを掻き込む。

やがてカレーも、付け合わせのサラダや小鉢なども食べ終えた悟は満足したように一息つき、冷めたお茶をぐいっと飲み干す。

そしてイビルアイに向き直る。

「……………ごちそうさま。本当に美味しかったよ」

「ああ、おそまつさま。喜んでもらえたようで良かった」

しみじみと礼を言う悟にイビルアイも満足げに返す。

「……………俺は今まで食事なんて栄養補給でできればいいなんて思っていたけど、うまいものを食べる幸せを知らなかっただけなんだなって……」

「お、おう……」

「アイが家に来て、アイの作ってくれる料理を食べて、食べるってことがこんなな人生に潤いと喜びを与えてくれるんだって初めて解ったんだ……」

途中まではドヤ顔だったイビルアイも心底感服したと言わんばかりの悟の感想に段々ドヤ顔にも照れが入り始める。

流石に自分の料理でそこまで人生観が変わるとか、ちよつと責任が取れない。

「いくらなんでも言いすぎだ、こんなもの魔神と戦って旅をしていたころちよつと覚えただけで……。そんな大したものじゃない……」

ほんのり顔を赤くしながらワタワタと謙遜するイビルアイ。

「いやでも、本当に。いつも美味しい食事を作ってくれてありがとうアイ。アイと出会ってから、毎日ご飯が美味しいんだ」

本当に幸せそうな顔でしみじみと告げる。

何の比喩でもない文字通りの意味での言葉なのだが真顔で言われてイビルアイの顔が真っ赤に染まる。

「う、うう……い、へ、変なことをそんな顔で言うな……」

悟の前でへニヨへニヨと崩れ落ち机に突っ伏す。

その様子に頭を掻きながらちよつと言い過ぎたかと思える悟。

でも本心だったしなー。

「あー…、うん…。ところで、明日の休みのことなんだけど…」

露骨に話題を切り替える悟に恨みがましい感じのする目を向けながらも、とりあえず視線で続きを促す。

「買い物に行きたいんだったつけ？ 欲しいものがあるからって…」

「ああ、実際に生活してみないとわからなかったが、思ったより必要なものというのはあるものだな」

「あー、うん。わかるわかるー。あとになって必要だったって気づくんだよねー」

多分悟が思い出して共感しているのはゲーム時代でのことなのだろうがあえて突っ込まない。面倒臭いからだ。

「それほど大きなものはないからショッピングモールで十分だと思うが」

「了解、じゃあ明日はショッピングモールに行こうか」

「ああ、頼む。それじゃあ私は片付けをするか」

「俺も手伝うよ」

食器をまとめて立ち上がるイビルアイに続き、悟も自らの食器をまとめ流し台へ運ぶために立ち上がった。



——翌日、ショッピングモール。

商品が山盛りになったカートを押しながら悟が思わずぼやく。

「買いすぎたな…」

「…：…こんなにいっぱいお店があるのが悪いんだ…」

前回と比べ精神に余裕も出てきていたためついついあれもこれもと目移りしてしまったイビルアイである。

もつとも、悟も悟で久方ぶりの「誰か」と共に行う楽しい買い物に浮かれていたので止めどころを見誤った感があるが。

「ところで、また荷物を増やすことになるが、あそこに寄ってもいいか？」

「ん？ 本屋？」

と、イビルアイが指差した先を見て首を傾げる悟。

イビルアイはひらがなとカタカナくらいしか読めないのだから本なんて買っても…。

「なにか、字を覚えるのに使えそうな簡単な本とかがあれば欲しいんだが。元の世界に戻れる宛もないし、この世界で暮らすならもう少し字が読めるようになりたい」

「あゝ、なるほど。不便だもんな字が読めない」と

最近イビルアイは暇な時間、テレビで学校に行けない子供向けの教育番組を見たりして日本語を勉強しているようだが、謎の翻訳効果はテレビには働かないらしく少々苦戦している。

半端に悟との会話だけ翻訳されて聞こえる弊害とも言えるが、文字を覚えて字幕でテレビの音声の内容が理解できるようになれば日本語の勉強は今よりも進むだろう。

「そういうことなら、そういう専用の本があるよ」

「専用？」

「ああ、こつちの方だ」

そう言つて二人が向かったのは学校に行けない子供向けの教育本コーナーだ。

「教育的だ」「学習効果重点な」「子供に豊かな将来を」などと派手な書体で書かれたポップが並び、その下に薄っぺらなプラスチックペーパー製の5〜10歳程度向けの様々な参考書や教科書が並べられている。

「学校に行けない子供はこういう本で勉強するんだよ」

「ほう、なるほど…。随分豊富だな。きつとこの国は国民の教育に力を入れてるんだらうな」

その言葉を悟は曖昧に笑つてスルーする。

悟も昔よりはモノを知っている。

ここにある本は悟が小学校で習ったものより更に偏った極僅かな知識と、社会で労働する際に必要なギリギリの読み書きや計算を教えるだけのものだ。

企業が労働者の初期教育のコストを支払うのを嫌ったから事前に学ばせている、ただそれだけの物だ。

「この辺のものを適当に買って帰ろう。内容は大きく変わらないうよ」
悟が適当な本を持ち上げるが、それをイビルアイが止める。

「まあ、待て。買い物をするなら少しでも良いものをだな…」

やはり長くなるパターンだ。悟は確信した。

「わかった。じっくり選んでくれていいよ。でも、ちよつと俺は離れるからカートを見ていてくれないか？」

「ん？ ああ、トイレか」

「…そっだよ」

ひらひらと手を振り、真剣に参考書を選び出すデリカシーのないイビルアイの態度を尻目に、悟はこれから何分自分は待たされるだろうかと考えながらトイレへと向かった。

用を済まし、書籍コーナーへと戻った悟が感じたのは嫌悪と、同情と、諦めの混じったざわめきだった。

よくないことが起こっている。理不尽がまかり通っている。自分のもとに来てほしくない。頭を低くしてやり過ぎなければ。

その空気を感じた悟も反射的にそう思った。この世界には悟の手に負えないものが多すぎるのだ。いや、悟の手に負えるものなんて殆どないと言っている。

面倒に巻き込まれる前に、多くの人と同様彼も目をそらして立ち去つただろう。その渦中の中心に悟の大切なものが囚われていなければ。

「アイ……ッ！」

本棚のあいだの通路でイビルアイがやけに質のいいスーツを来た複数の男に囲まれている。営業マンとして様々な人種を見てきた悟の目は彼らがアークロジューに住むいわゆる上位層の中でもさらに上位に属する、特権階級の金持ちとそのボディガードだと見抜き、思わず頭を抱えそうになった。

男たちが手を伸ばし執拗にイビルアイを捕まえようとするのを、イ

ビルアイは尋常ではない身のこなしで逃れているが荷物の入った大きなカートを抱えては包囲を突破することもできないようだ。

悟は冷や汗を流す。今はまだ穏便になんとかしようとしているが、もしもイビルアイが本気を出したら彼らは血煙と化すだろう。

悟がなんとかするべきか？　だが悟に何ができるか？

だが一瞬、イビルアイの困ったような目と悟の目が合った。冷静に考えてみれば、助けを求めているというわけではなかったのだろう。ただ、どうすればいいのか迷っていた、その程度だったと思う。

しかしその瞬間、悟は懐かしい人の声を聞いた気がした。

それは出会ったときの言葉ではなく、別れのとときの言葉だったかもしれない。

別れるとき、彼は家族を取った。他の何でもなく家族を取った。悟や他の友人や、皆で作り上げた全てを捨てて家族を取った。その気持ちに、悟はたった今、ようやく共感できた。

——家族を守らなければ。

共に過ごした期間は短くとも、すでにイビルアイは悟にとってかけがえのない大切な家族なのだから。

悟が一步を踏み出すとイビルアイの目に微かに期待が宿る。悟としてはあまり期待しないでほしいが。

「…うちの娘に何をしているんだ？」

悟が声をかけたのに反応してイビルアイを捕まえるのに夢中になっていた男たちがぐるりと振り返る。

その中のひとり、ひとときわ高級なスーツを纏った男——若作りをしているが中年を超えつつある年齢であると悟の目には見抜けた——が悟を無遠慮な視線で品定めしてから口を開く。

「お前がこの娘の保護者か…。この娘は私が引き取ることにした。お前はもう失せろ」

許可を求めるわけでも、命令するわけでも、脅すわけでもなく、ただ当たり前のことを教えるかのように告げられ、一瞬悟も「は？」みたいな顔になって硬直してしまう。色々想定してはいたがちよっと予想外だった。イビルアイも動かしていた口を止め「へ？」みたいな

顔になっている。

その男にとつて、街で見かけた眼鏡にかなう美しさを持った下層階級の娘を連れて帰るなどということは自宅の本棚から読みたい本を抜き出し己の手元に持つてくる行為と同じで誰かに遠慮することなどではない、とでも言わんばかりの態度だ。

その硬直の隙に目配せをされたボディガードが悟を押しつけるようにずいと立ちふさがる。

「向こうへ行け！」

ガタイの良い男の凄みに悟も怯みそうになるが、ぐつと堪える。

既に仕込みは順調に進行中だ。

無言で首を振る悟に、ボディガードの男もはやそれ以上語らず拳を振り上げる。

「ふんっ!!」

しかし、既にイビルアイから《ミドル・ハードニング／中位硬化》《センサーブースト／感知増幅》《ミドル・デクスタリテイ／中位敏捷力増大》《パワー・オブ・ザ・ゴリラ／禁じられた力》《リーンフォース・アーマー／鎧強化》などの強力な補助魔法を受けていた悟は危なげなく攻撃を避ける。

争いに不慣れた相手なら概ね当てられたはずの一撃をあつさり避けられボディガードが警戒するように身構える。だがその瞬間悟を殴るために綻んだ包囲の僅かな隙間をイビルアイは見逃さずカートを引っ張りながらすりりと逃げ出す猫のようにすり抜けた。

「あっ!!」

慌ててボディガードがイビルアイを捕まえようと手を伸ばすがイビルアイが事前に唱えていた《インターファイアレンス／妨害》に阻まれ空を切る。

「ま、まてっー！」

待つわけがない。悟が強化された筋力でカートの中の荷物を掴み上げるとイビルアイはカートが通路に引っかかるように放り出して駆け出す。高レベル吸血鬼であるイビルアイと強化魔法で強化された悟は一陣の風のように駆け抜け、あっという間に見えなくなつてし

まう。

その常識離れのスピードに男たちは対応できず、ただ、見送ることしかできなかった。

——数分後。

電気の明かりが消えた悟の部屋に音もなく悟とイビルアイが現れる。

店から飛び出した二人はそのまま人目がないところまで走って移動しテレポートで帰宅したのだ。

「ふう……。やれやれ……」

「ああ……。なんだか、すまなかった。妙なトラブルを呼び込んだみたいで……」

「いや、俺の方こそ目を離したのが悪かった……」

イビルアイは中身が大人なので放つて置いてでも大丈夫と楽観的に考えていた部分があった。

「しかし……。この世界にもあんな人間が居るんだな……」

「あんな人間って……。イビルアイの世界にも居たの？」

「ああ。まあ、魔導国に併合される過程で粛清されたがな。昔はよく居た」

王国で冒険者をやっていた時代のことを思い出したのか苦々しく吐き捨てる。

「どこも一緒か……」

遠い目をしながら悟が頭を搔く。しかし魔導国に併合される過程で解決されたというのは羨ましい。この世界にも魔導王が居ればいいのに。

「……なあ、あいつは諦めるかな？」

「……どうだろう？」

イビルアイを狙った男が一度逃したことで諦めるほど諦めが良いとは限らない。

諦めずにイビルアイを探し出してもう一度誘拐しようとするかもしれない。

イビルアイには個人情報がないため困難であろうが、悟には普通に

個人情報がある。あのショッピングモールでクレジットカードを使用したこともあるので金持ちが本気で調査をすれば悟までは容易にたどりつけるだろう。

「諦めてくれるのを祈るしかないか…」

「…そうだな」

そんな祈りが届くはずがないのだけれど。



「鈴木くん、あー、なんとというか…。君を懲戒解雇するようにという通達が来た」

「……………は？」

数日後、悟は上司に呼び出され、突然の解雇通告を受けていた。

「な、なんでですか?!」

いきなりにも程がある。頭を殴られたような衝撃に耐えながらころうじてそれだけ問いかけると、上司は苦渋というか悲痛というか、なんかそんな感じの感情に顔を歪ませながら口を開く。

「ああ…。私もわからんのだよ…。つい先程、私も社長から直々に言われたんだ。理由を聞いても決まったことだの一点張りでな…。…すまない」

私も抗弁はしたのだが、と言いつ事を続ける上司の前でよろりとよるめき、思わず悟の意識が遠のく――。

悟は大荷物を抱え力ない足取りで自宅への道を歩いていた。

突然の解雇通告を受けた後は意識も虚ろなままに荷物をまとめさせられ、会社から追い出されたのだ。

送別のようなものもない。関わっていられるかと言わんばかりに。

「……………どうしたものか…」

いきなり無職になってしまった悟に再就職の宛などない。

イビルアイとの生活物資を揃えるために多少切り崩したとはいえまだそれなりの貯蓄はあるが、それも無限ではない。

収入が無ければ数年で枯渇するだろう。

一応イビルアイには駅で携帯端末を使ってなんとなく経緯を伝えしたが、かなり気に病ませてしまった。

電話を切ってからメッセージでさらに謝られたりとなかなかしつこい。

そんな風に今後の暗い展望に思いを馳せながらトボトボと帰路を歩いていた悟は…。

ドガッ！

突然の背後からの衝撃で地面を転がった。

「うぐっ…！… なにが…？」

後頭部を突然殴られた痛みにうめき声を上げながら身体を起こそうとするが、襲撃者たちの蹴りによって再び地面を転がる。

しかし転がったことで襲撃者の正体は確認できた。野外でありガスマスクを付けているため顔は見えなかったが、その上質なスーツには見覚えが合った。

「このあいだの…！」

そう、数日前にイビルアイを誘拐しようとした金持ちのボディガードたちだ。金持ち本人は来ていないが。

男たちは無言で悟を囲んで警棒で殴り始める。悟も必死で頭を庇うがその庇う腕や足に容赦なく警棒が振り下ろされる。

「う…ぐお…」

殴られ続けて何分経ったのか、やがて警棒が振り下ろされるのが止まる。

「う、うう…！」

殴られすぎた腕は痛いという感覚すら感じなくなりジンジンと痺れるような感覚しか感じられない。それでも身体を動かし、少しでもこの状況を打開する方法を考えるが。

「お前はそっち押さえろ」

「うす」

ダメージでまともに抵抗できない悟は男たちによって大の字に転がされ手足を押さえ付けられ固定される。

「殺すなど言われている。心配するな、とは言えんが」

リーダー格と思しき男が言い訳をするように悟に語りかけ、悟の右腕を押さえている男に合図をする。すると右腕を押さえていた男は悟の右腕を引っ張り手首を縁石の上に乗せ、前腕にリーダーが足をかける。

腕の骨を踏み折るつもりだ。そのことに気付いた悟の顔が青ざめる。

骨折などという大怪我は下層階級に生きる者にとって致命的だ。治療に大きな金がかかるだけでなく、数週間も働けないとなると普通にクビになる。

「悪く思うな」

リーダーの男は自分に言い聞かせるようにそう呟きながら、死刑執行人が斧を振りかぶるように足を持ち上げ…。

ボギツ!

「がああああっ!!」

骨が碎ける音と絶叫が汚染された大気を震わせた。

最終話 アイちゃんリアルを続ける

男は大型バンの助手席に座ってスチール缶に入ったオーガニック・コーヒーを飲みながら寛いでいた。

イビルアイを攫おうとしたあの男である。

見目は悪くない。先祖代々富裕層な彼の家は代々見てくれの良い血統を取り込んでおり、また定期的にトレーニングジムでスポーツをしている身体は十分引き締まっている。

更には常に人の目を浴びながら生きてきたことで培われた草や表情の動きによって人の好感を十分に引き出す術にも長けているためである。

生まれながらに全てを手に入れたカチグミ…それが彼だ。

彼は部下たちにイビルアイを確保してくるよう命じているが実のところそこまで真剣にイビルアイを求めているわけではない。

イビルアイの容姿はたしかに美しいが、ただ美しい程度の娘など彼のコネクションを使えばいくらでも購入することが出来るのだから。それでもあえてなぜ一般人に手を出すのかと言えば、それは彼らが必死で抵抗し、それでも圧倒的な力の差の前に屈服し絶望に沈むさまを美しいと感じるからだ。

彼にとつて下層階級の人間とは飼育キットの中のアリと同レベルの存在といえる。

アリが飼育キットの中に立派な巣を作り上げた頃、人は割り箸を突っ込んで巣を崩壊させるのだ。アリは必死で割り箸に噛みつき抵抗するだろう。手元まで登ってきて指に噛み付くかもしれない。だが、割り箸にも人間にもアリの一噛みなど通用しない。儂い抵抗も虚しく巣は蹂躪される。その様のなんと美しく切ないことか。

アリでもこんな感動できるのだ。もしそれが人間だったなら更に感情移入できより大きな感動を得ることが出来る。無力な存在が自分では抗えない大きな力に翻弄され、蹂躪され、打ちのめされ、儂くも散っていく…。その哀れな姿に彼は性的興奮さえも感じるのだ。

それに比べれば攫った娘を犯し陵辱することなどそのドラマの中

にあるちよつとしたワンシーン、添え物にすぎないと言つても過言ではないだろう。

今回の娘はどうしようか？

戸籍や個人情報調査をしたところ二人はどうも親子ではないようで、いまいち何の繋がりによって同居しているのかわからないのでどのくらいの絆があるのか試していくのもいいかもしれない。

娘の目の前で男を拷問に掛け娘が男を助けるために何処までするか試してみるか、逆に男の目の前で娘を拷問して娘のためにどこまで出来るか反応を見るか。

めくるめく愉悦の時間を夢想し顔を歪める。

ふと、その耳朵にザアツという雨とも風とも違う耳慣れない音が入り込む。

「ん？」

顔を上げ窓の外に目を向けたその瞬間。

バチバチッ！

何かが弾けるような音とももに両腕に激痛が突き刺さった。

「ぎゃああ!!」



「うがあああああっ!!」

腕を折られた激痛に身悶えする悟。

折られた腕を押さえて転げ回りたいが、全身を4人がかりで押さえ付けられていては悟の運動不足気味な体力ではとても跳ね除けることは出来ない。

「ぐううあああああっ!!」

男たちは悶える悟の動きを抑えようと更に力を込めて押さえ付け、悟の折れた腕に鋭い痛みが走り悟の口からさらに悲鳴が上がる。

「……次だ」

リーダー格の男が再び男たちに合図をし、今度は左腕が縁石に立てかけられる。

「…………ふうー…」

溜息をつくような音をガスマスクから漏らすとリーダー格の男は悟の左腕の上に再び足をかける。

それを見て身をすくませ身体を硬直させる悟だが、その程度で耐えられるものではない。

しかし、そこに微かに響く小さな着地音。そして、くぐもった奇妙な声が続く。

「…っ!？」

「《クリスタル・ダガー／水晶の短剣》！」

声が響くより一瞬早く反応し、身を翻し回避行動を取っていたリーダー格の男以外の全員の身体に無数の鋭い水晶の塊が突き刺さりバタバタと倒れる。

押さえ付けられていた悟も開放され、ようやく激痛を訴え続ける折られた右腕を抱え込み身体を丸める事ができた。

「うううああああ…っ!! 行ってえ…」

身を翻したリーダー格の男は体勢を崩したまま懐からリボルバーを取り出すと声のした方向へ向け、微かな明かりを受け闇に浮かぶ白い仮面の少し下に向かって躊躇なく発砲した。

パン！ という乾いた音とともに撃ち出された鉛玉は、冒険者としてのフル装備を持ち出してきたイビルアイの胸元にあたって弾かれる。

一瞬で体重移動を行い体勢を立て直してもう1射。今度は姿勢も安定しているため仮面に覆われた頭部を狙う。

イビルアイは先程の1射でこの攻撃が躲すまでもないものだと気付いていたが、流石に眼前に迫ってくるのには少々に不快感を覚え、軽く身体を傾けて弾丸を躲す。

その動きを見てリーダー格の男は悟った。この存在は自分の手に負えるようなモノではないということ。それでも彼は生きるために足掻く。

イビルアイを睨んだまま丸まるように蹲った悟に銃を向ける。わずかでも「あれ」の意識をそらすことが出来れば逃げるチャンスが

生まれるかもしれないとの考えであるが…。

「ぎっつ！」

右手に激痛。そこに目を落とせば全く目を逸らしていなかったはずのイビルアイがすぐ近くに居てその小さな手で拳銃ごと男の手を握りつぶしていた。

「ぐっっ！」

呻きつつ握り潰された銃から右手を引き抜き、突き飛ばすように前蹴りを放つ。

しかし、その蹴りはイビルアイにあっさりとは片手で掴まれてしまふ。

「ぼきんっ！」

「ぐあっ!?!」

掴んだ足を片手で握りつぶすイビルアイ。そして、イビルアイは手の中に水晶の刃を作り出しながら振りかぶり…。

「ずどんっ！」

「うぐっ…お……」

情けも容赦もなく放たれた突きがリーダー格の男の胸を貫いた。

イビルアイが水晶の刃から手を離すと同時に崩れ落ちるリーダー格の男。

「……………さ………幸………子……」

「ごぼごぼと血を吐きながら最後に小さく呟き、男は永遠に動かなくなった。」



イビルアイは無様に腕を押しえ脂と汚れにまみれた地面にうずくまる悟に歩み寄ると、腰にぶら下げたポーチから治癒ポーションを取り出し、その背中に浴びせた。

アダマンタイト級冒険者であるイビルアイが持つポーションは当然錬金術と魔法によって作られた最高級品であり、その青い液体は悟の外出用の防水コートにシミひとつ付けず悟の身体に吸い込まれて

いき、悟の傷を癒やす。

そして数えること数秒。

悟の震えが止まり、折れた腕を恐る恐る動かし、手の平をにぎにぎと開閉させる。

「大丈夫か？」

イビルアイはもう大丈夫だろ、という意味を込めて悟に声をかけるが、悟から帰ってきたのは恨みがましい雰囲気を漂わせた声だった。

「遅いよ、アイ…。すっごく痛かったんだから…」

その恨み言にイビルアイは呆れたように切り返す。

「お前がメッセージで『殺されはしないようだから救助は後回しにして周辺のクリアから行え』って言ったんじゃないか」

「それでもさあ…」

文句を言いつつも立ち上がる悟。ポーションのお陰で身体に一切の痛みは残っていない。

目を落とせば血まみれの男たちが倒れる凄惨な現場。ガスマスクを外せばきつとむせ返るような血の匂いもするのだろう。

しかし…。

「案外、なんでもないんだな…」

悟はそれを見ても何の感慨も沸いてこないことに微かに戸惑う。自分を痛めつけた者たちが無残に死んだことで胸がすぐわけでもなければ、自分たちが人を殺したことへの罪悪感を感じることも、無残な死体を見てしまったことに対する恐怖や嫌悪感も浮かばない。

身体に突き立つ魔法で出来た水晶の煌めきが現実感を奪っているのか、ただ単に悟がDMMOのやりすぎで「ゲーム脳」になってしまったのか。

あるいは、あとになって悪夢にうなされるのかもしれない。

頭を振る。

今はどうでもいいことだ。

「それで、アイ。殺していないんだよな？」

「ああ。ちゃんと動けない程度にとどめておいたよ」

くいくいつ、と手招きをするイビルアイに続いて、道を進み、曲が

り角を曲がると大きなワゴン車が視界に現れた。

もつとも、普通の人が見ればその異常な状態に驚くことだろう。フロントガラスには幾つもの穴が空き、砂に半ば埋もれるようにして座礁しているのだから。

悟はもちろん驚かない。

なぜならそれは悟がイビルアイに「司令官が近くにいるようならば捕まえてくれ」とお願いしたことによって成されたことだからだ。

悟が近づき、フロントガラスから中を覗き込む。

運転席には胸に水晶を撃ち込まれ絶命した男が倒れ込み、助手席には両腕を水晶で貫かれた男が苦しげに身悶えしていた。

その顔には見覚えがあった。先日シヨツピングモールでイビルアイに手を出そうとしていた金持ちの男だ。まさか本人が来ていたとは…。

ひとまず搭乗者は誰も車を動かさない状態であることは確認できたのでサンドフィールドを解除してもらい、ドアを開ける。

「ごほっ…ごほっ…。助けてくれ…。命だけは…」

ドアが開いたことで車内に流れ込んできた汚染大気に咽ながら弱々しく命乞いをする男に、悟は難しい顔をする。

「どうしたものか」

ゲーム時代のノリで別に伏せていた部隊を捕獲してみたが、それらの装備を剥いだりアイテムや金をせしめることが出来るわけでもないことに今さら気づいてどうしたらいいのか悩み始めたのだ。

そんなことを悩みながら考え込む悟を見上げながらイビルアイが悟の袖を引っ張って注意を引く。

「アイ?」

「私にいい考えがあるぞ」

振り向いた悟に向かってイビルアイは満面のドヤ顔で漠然と失敗フラグを感じさせる言葉を放った。



悟は豪華な自室からアーコロジの天井に設置された人工太陽の夕暮れを眺めていた。

天井の色は茜色と藍色に染まり、東の空にはポツリポツリとLEDの星の輝が浮かび始めている。

既に自然界からは失われた美しい風景である。

「でも、ナザリック第六階層の空と比べたら…な…」

ポツリと呟く悟に部屋の奥から声がかかる。

「まだ言ってるのか？ そんなことより食事が出来たぞ」

「ああ、ありがとう！ すぐに行くよ！」

返事をした悟は広く、豪華なりビングを横切りキッチンへと向かう。

現在悟が居るのはアーコロジの中でも一等地の小高い丘に建てられた庭付きの一戸建て住宅である。

当然悟が自分の経済力で手に入れたものではない。

数ヶ月前、イビルアイを狙って悟を襲撃した男（悟はもう名前を忘れてしまったが）をイビルアイは眷属とし、そこからさらに芋蔓のように辿って世界を牛耳る八大企業のことごとくを支配下に置いたのだ。

イビルアイは最初、程々に眷属を作って自分の存在を隠匿し続ける方向で考えていたらしいが、吸血姫であるイビルアイが非常に多くの眷属を作り支配することが出来ると知ってテンションの上がった悟が「やれるとこまでやろう！」と悪乗りし、本当に行き着くところまで、すなわち世界征服するに至ったのである。

ぶつちやけ悟も終わってからやりすぎたと思ったりはした。

しかしやってしまったのだから仕方ないと開き直って贅沢の限りを尽くす…、とはいかず、開き直っても所詮根っこからなんとなく小市民臭が抜けない悟とイビルアイは支配した者たちが所有していた物件の中からそれなりな感じで落ち着ける程度の豪邸を見繕い、そこで自由な生活を満喫していた。

「あれ？ なんか今日は豪勢だな？」

「ん…、まあな…」

悟は食卓に並べられた普段より豪華な食事に目を見張る。

権力と富の頂点に立ち、物を買うという概念さえ必要としなくなった二人が食べる食材はもちろん有機物循環システムで作られた合成食材でも、クローン培養されたバイオ食材でもない。

全て工場で徹底管理して育てられた天然食材（遺伝子調整済み）である。

そしてイビルアイは悟との共同生活の間に料理に目覚めでもしたのか、使い切れないほどの金と権力を得ても変わらず毎日料理を作っては悟と二人一緒に食べていた。

そんなイビルアイだが、今日は悟の賛辞の言葉にもあまり反応せず、どこか浮かない顔をしていた。

「アイ？」

「…うん。いいから、まずは食事にしよう」

「…分かった」

食事を促すイビルアイに了解し食事を始める悟だったが食事中も変わらずいまいち浮かない表情をしているイビルアイが気になってせっかくのご馳走がうまく喉を通らない。

（うー、きまざういー）

そんなことを考えながらも食事の手を止めない悟だったが、イビルアイが唐突に匙を降ろしたことで手を止める。

「アイ？」

悟の声に一つ溜息をつくといビルアイは機械のように平坦に言葉を発した。

「調査の結果が出た」

調査？ と頭にハテナマークを浮かべる悟を無視するようにイビルアイは言葉を続ける。

「私が元の世界に戻る、この世界と私の世界を行き来する方法についての調査だよ」

「ああ…」

悟も思い出した。かつてイビルアイの世界に本当にユグドラシルプレイヤーが、この世界の人間が渡ったというのならば、そしてそれ

がもし人為的に引き起こされたものだったのなら、それを利用してイビルアイを元の世界に帰還させる手段が見つかるのではないかと考え眷属に命じて異世界移動に関する技術や研究、実験について調査をさせたのだ。

しかし、イビルアイの表情を見ればどのような結果だったのかは一目瞭然だろう。

「そんな研究や実験は無かったってことか？」

コクリと頷くイビルアイ。

それを見て悟は胸を締め付けられるような感覚を覚えた。

「その…イビルアイ…。俺は…。俺が…」

「いいんだ、大丈夫だ。この結果はちゃんと覚悟していた。そりゃ、少しはがっかりしたけれども」

少しだけ笑うイビルアイ。その儂げな笑顔に悟は思わず赤面してしまい、視線を彷徨わせる。

「私はこの世界で生きる。それしか無いし、その覚悟も出来た」

イビルアイの表情が意を決したように硬くなり、悟の目を見つめる。

「それでも、私にも耐えられないことはある…」

「耐えられないこと…」

イビルアイにじつと見つめられて怯んでいた悟だったが、イビルアイの表情の中に大きな弱さを見出し、スツと心を冷やした。

(俺がアイを支えてやらないと…)

悟の目に力が宿ったのに気付いたのか、イビルアイの愛らしい顔に僅かに安堵が宿る。

「ところで、ここ数ヶ月で大量の血を吸って眷属を作ったせいかな私は成長したみたいなんだ」

「う、うん…」

唐突な話題転換に一瞬面食らうもイビルアイが何を言おうとしているのか聞き逃すまいと真剣な表情で相槌を打つ悟。

「私は成長して、新しい力が生まれた。今、私はたった一人だけ私の仲間を作る事が出来る」

「仲間…？ 眷属じゃなく？」

「そうだ。眷属などではなく私の仲間。誰かを吸血鬼の王族にする力だ」

ユグドラシルにはPCやNPCに自分の種族をコピーするような能力など無かったが…。などと一瞬悟は考えたがすぐに思考から振り払う。これはゲームなどではなく現実リアルの話なのだ。

「…私はこの世界で生きていく。それはいい。でも、一人ぼっちで永遠にこの世界を彷徨い続けるのは嫌だ」

イビルアイの声は震え始めている。

「私はかつて孤独だった。孤独が当然だと思っていた。温もりなんて得られないと、得る資格なんて無いと思っていた……」

イビルアイの言葉には様々な感情が複雑に混じり合い乗っており、人間関係の機微に疎い悟ではイビルアイの心情を深く推し量ることなど出来ない。

「でも、もう孤独じゃない。温もりが孤独を拭ってくれた。……もう私は誰かの温もり無しで生きていくことは出来ないんだ……」

イビルアイは無意識の内に目を閉じ、祈りを捧げるように、何かに耐えるように硬く手を組む。

「…アイ」

だが悟はイビルアイが言葉を続けるより先に口を開き、その声の硬さにイビルアイがピクリと震える。

「アイのことを孤独になんて、俺がさせないよ」

悟の声はどこまでも真剣だった。

「アイ…。俺がいつまでもアイと一緒にいる。だから…」

「…さ…サトル…」

「だから俺をアイと同じ吸血鬼にしてくれ」

悟の強い告白に、イビルアイの美しい瞳から涙が零れ落ちる。

その様子を見てオロオロしだす悟。泣いている女の子を前にうまく対応できるほどの経験が悟にはない。

そんな悟に溢れる涙を拭いながらイビルアイは無理矢理のように笑顔を作って悟に笑いかける。

「キーンだ」

「え？」

「私の本当の名前だ。キーン。その名前で、もう一度さっきのセリフを言ってくれないか？」

先程まで泣き笑いだったイビルアイがもうイタズラっぽい笑顔を浮かべて自分に期待の目を向けていることに気付く悟。

色々と言いたい気分になったがぐっと堪え、一世代の告白の言葉をもう一度繰り返した。

「キーン…」

そしてその日の夜、死の支配者^{オーバーロード}として永遠に地球に君臨し続ける吸血貴のカップルが誕生した。